

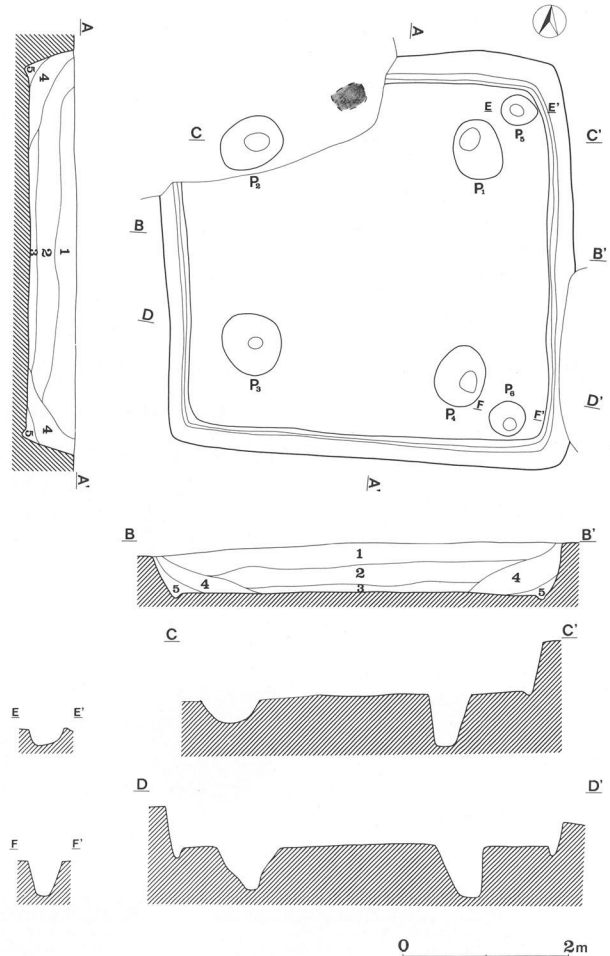
(5) H 5 号住居址

古墳時代

H 5 号住居址の検出位置は、第Ⅱ区Eけ・こ6・7グリッドである。北西隅とカマドはH 4号住居址によって、東壁南半上部はH 6号住居址によって破壊されている。また、西壁の一部が耕作溝で破壊されている。

平面形態は隅丸方形を呈し、残存部では南北4.9m、東西5.0mを測る。壁は100度程の急傾斜で立ち上がる。確認面からの壁高は50~60cm程である。周溝は壁直下を全周したものと考えられ、幅7~15cm、深さ2~14cmを測り、断面はU字状をなす。

支柱穴は、H 4号住居址床面下から検出されたP 2を含めるとP 1~P 4の4個からなり、壁際によった規則的な配置で捉えられる。掘り方は大形で、P 1は75×56cm、深さ65cm、P 2は61×78cm、深さ29cm、P 3は75×72cm、深さ50cm、P 4は75×60cm、深さ63cmの規模を有する。また、北東隅に36×45cm、深さ20cmのP 5、南東隅に42×45cm、深さ44cmのP 6が確認された。なお、カマドは破壊されていたが、H 4号住居址床面下から焼土が確認され、北壁中央に構築されていたものと考えられる。



第27図 H 5 号住居址実測図 (1 : 80)

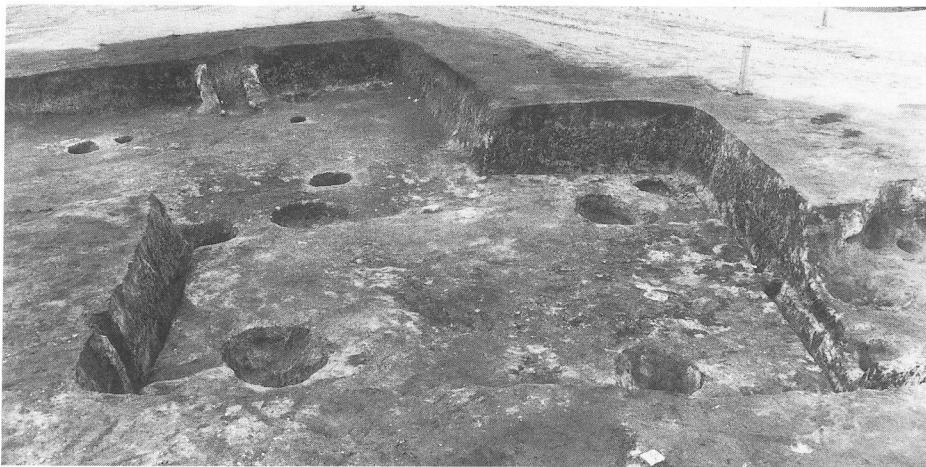


写真28 H 5 号住居址

住居覆土は、1～3層が住居中央を埋める覆土で、1層が黒褐色土、2層が暗褐色土、3層が暗褐色土である。4・5層は壁際に流れ込んだ土層で、4層がパミス、ローム粒子を多く含む褐色土、5層が黒色土である。

遺物

本址から出土した主要遺物は少なく、土師器で
 杯・鉢・甕が検出された。

1は、体部が丸底を呈する底部との境に緩い稜をもって外反し、ヘラミガキが施され、内面黒色処理された土師器杯である。住居中央部の床面に破片が分布していたものである。

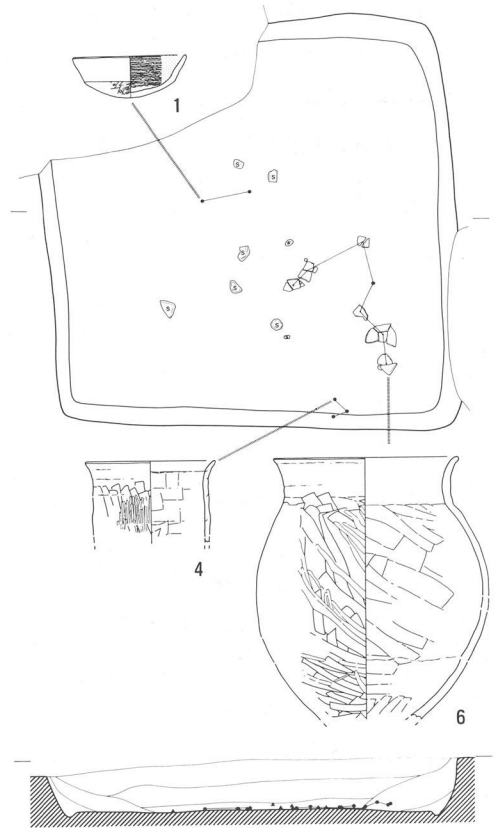
2は、内面黒色処理された土師器杯の体部破片で、Ⅳ区3層から出土している。

3は、口縁部が短く外反し、平底を呈する鉢である。西壁際の周溝上5層で検出されている。

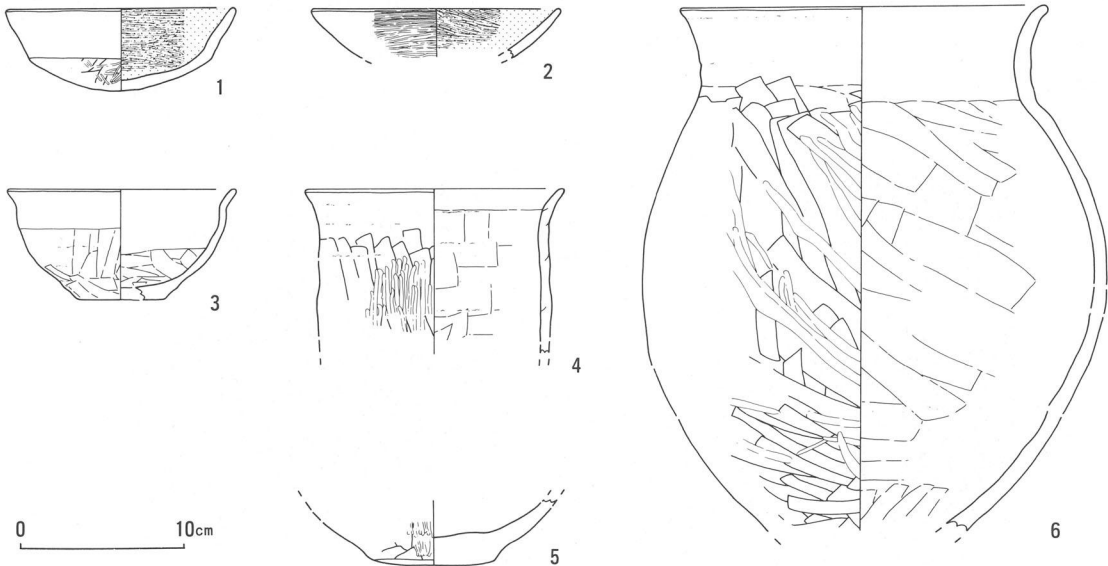
4は、口縁部が緩く外反し、ヘラケズリの後にヘラミガキがなされた小形の土師器長胴甕で、Ⅳ区南壁際の床面と5層に破片が分布していた。

5は、ヘラミガキが施された球胴形を呈する土師器甕の底部破片と思われる。Ⅱ区3層から出土したものである。

6は、頸部が直立し口縁部が短く外反し、胴中



第28図 H5号住居址遺物分布図



第29図 H5号住居址出土土器（1：4）

中央に最大径を有する土師器球胴甕である。ヘラケズリ後にヘラミガキが施されている。Ⅳ区床面から4層に破片が散在していた。

なお、住居中央床面に安山岩の角礫の散漫な分

布がみられた。

以上の土師器坏・土師器長胴甕・土師器球胴甕の特徴と組成から、H5号住居址の土器群は、古墳時代後期の土器様相として理解されよう。

表8 H5号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調	整	色調	出土位置	備考
1	土師器	坏	14.0 — 5.1	口縁3/4 底部完形	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ・みこみ部ナデ→ヘラミガキ→黒色処理 外面：口縁ヨコナデ・底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	外面：10YR6/1 断面：10YR6/2	Ⅱ区床面		
2	土師器	坏	(15.2) — <3.0>	口縁1/4	非ロクロ	内面：ヘラミガキ→黒色処理 外面：ヨコナデ→ヘラミガキ	外面：5YR5/4 断面：10YR8/3	Ⅳ区3層		
3	土師器	鉢	(14.0) (5.6) 6.7	口縁1/6 底部1/6	非ロクロ	内面：胴部～底部ナデ→口縁ヨコナデ 外面：胴部・底部ナデ→口縁ヨコナデ	内面：5YR5/3 外面：5YR5/3 断面：5YR5/3	Ⅱ区5層		
4	土師器	甕	15.8 — <10.0>	口縁7/8	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ 外面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ	内面：5YR5/1 外面：5YR5/1 断面：5YR5/1	Ⅳ区床面 Ⅳ区5層		
5	土師器	甕	— 7.6 <4.0>	底部完形	非ロクロ	内面：ナデ 外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ	内面：5YR6/4 外面：5YR6/4 断面：5YR7/4	Ⅱ区3層		
6	土師器	甕	22.2 — <32.2>	口縁完形	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ 外面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ後ヘラミガキ	内面：7.5YR7/6 外面：7.5YR7/6 断面：7.5YR8/3	Ⅳ区床面 Ⅳ区4層		



写真29 H5号住居址出土遺物

(6) H 6 号住居址

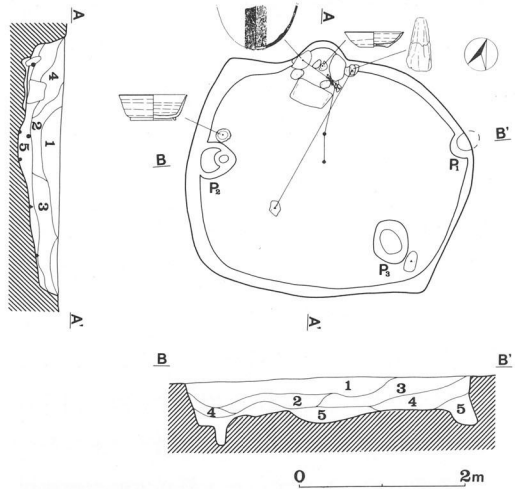
奈良時代

H 6 号住居址は、第Ⅱ区Eく・け7グリッドより検出された。

本住居址の平面形態は、南北2.9m、東西3.4mの楕円形に近い隅丸方形を呈し、床面積が7.2㎡の小形住居である。主軸方向はN-15°-Wを指す。壁は100度程の急傾斜で立ち上がり、確認面からの壁高は32~42cmを測る。床面の状態は不安定である。

支柱穴は2個（P 1・P 2）が東西壁の中央部に対称的に配置されていた。P 1は壁に斜めに穿たれたもので、25×33cm、深さ17cm程度を測る。P 2は2段の掘り込みからなり、44×57cm、深さ36cmを測る。また、南東隅で53×40cm、深さ11cmのP 3が検出されている。

住居覆土は5層の堆積で把握したが、ロームブロックの混入の在り方から、人為的に埋め戻されていた可能性が高い。1層はパミス・ロームブロックを多く含む黒褐色土、2層はパミス・ロームブロックを多量に含む暗褐色土、3層はパミス・ロームブロックを含む暗褐色土、4層はパミス・ローム粒子を含む褐色土、5層は黒色土である。



第30図 H 6 号住居址実測図（1：80）



写真30 土器4出土状態



写真31
H 6 号住居址

カマド

北壁中央部に構築されていた。煙道部は半円形状の掘り込みである。袖部の構築には、面取りした軽石と須恵器大甕の破片が用いられていた。左袖では、壁をピット状に掘り込む。そこに大形の軽石を埋め込み、さらにその軽石を須恵器甕の大形破片で覆う。その手前に小形の軽石を据える。という構築方法がみられた。

一方、右袖では、壁に接して大形の軽石2個を併設し、その前方に据えられた軽石との隙間を埋めるように須恵器甕の小破片3個が立てられていた。また、火床部には支脚石(6)が据えられていた。以上の袖石、支脚石を固定する際に用いられた埋土は、基本的に褐色土(③層)であった。なお、手前に横たわっていた大形長方形の集塊岩は天井石であったと考えられる。

覆土には、構築材に用いられたと考えられる橙色粘土ブロックを含むにぶい黄褐色土(①層)、炭化物を含む黒褐色土(②層)の堆積がみられた。

遺物

検出された主要遺物は、須恵器坏・甕である。

須恵器坏では、底部が回転糸切りで未調整のもの(1・2)、回転糸切りの後に手持ちヘラケズリが施されているもの(3)が検出されている。

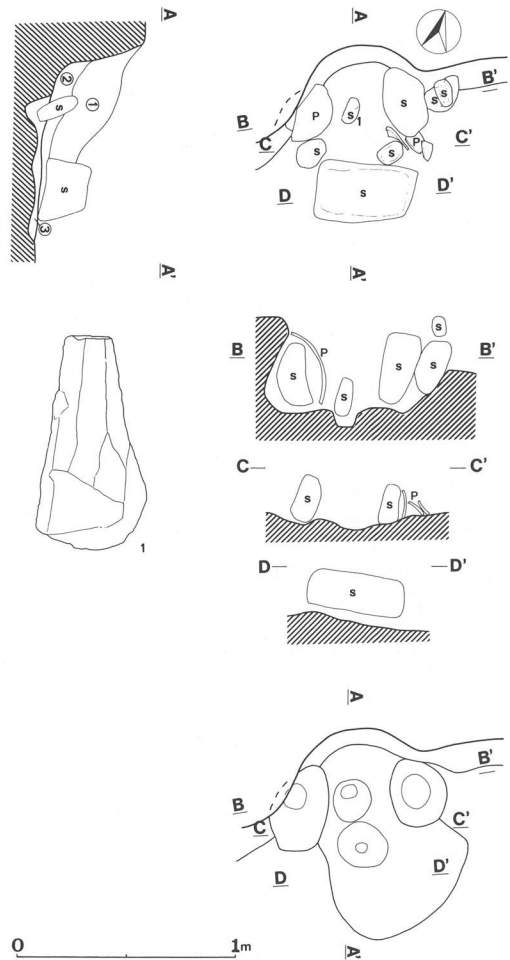
1はカマド内、2は南東隅の1層、3はI区1層の出土である。

4は器高が高く口径の大きい須恵器高台付坏で、P2脇の4層から検出された。

5は丸底を呈する須恵器甕で、カマド袖部とカマド手前の床面に分布した破片が接合したものである。

6・7は軽石を加工した支脚石で、6はカマドに設置されていたものであり、7はカマド右袖にあった上半部とⅢ区床面に分布していた下半部が接合したものである。

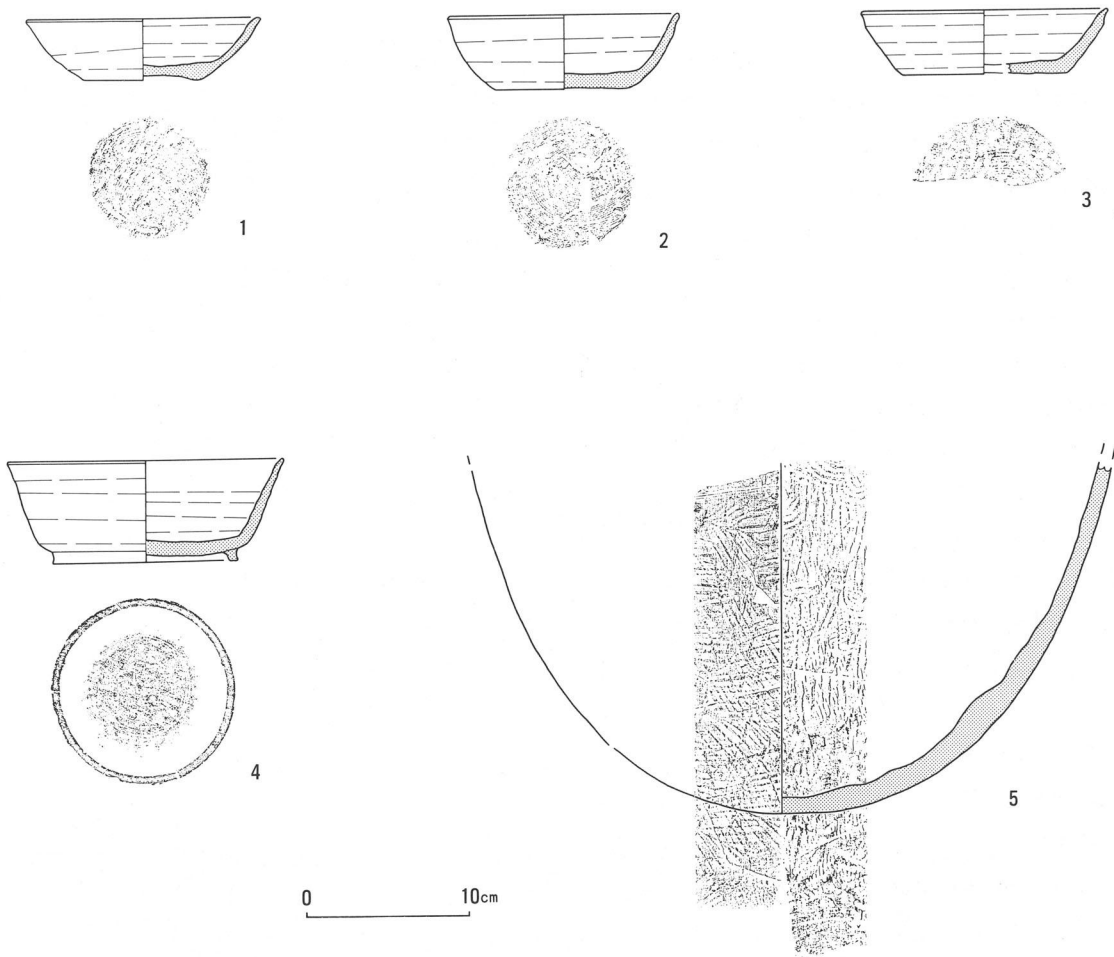
本址の土器群は、須恵器坏・須恵器高台付坏の特徴から、八世紀第Ⅳ四半期～九世紀初頭の土器様相と把握されよう。



第31図 H6号住居址カマド実測図(1:30)



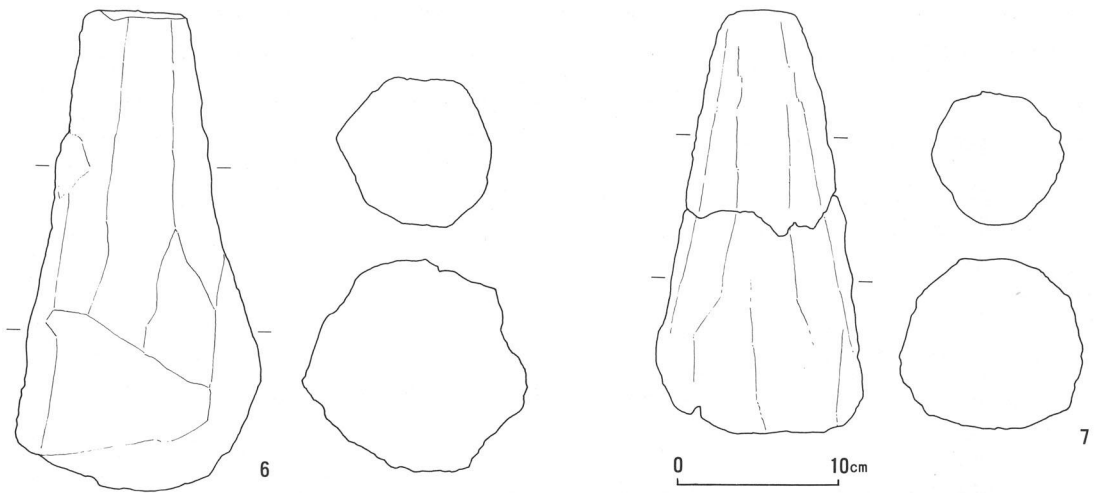
写真32 H6号住居址カマド



第32図 H 6号住居址出土土器（1：4）

表9 H 6号住居址出土土器観察表

挿図 番号	種別	器形	法量	残存	成形	調	整	色調	出土位置	備考
1	須恵器	坏	14.4 7.5 3.8	口縁5/8 底部完形	ロクロ	→底部回転糸切り		内面:7.5Y R6/4 外面:2.5Y R6/4 断面:7.5Y R6/3	カマド	火礫あり
2	須恵器	坏	14.2 8.4 4.5	口縁3/4 底部完形	ロクロ	→底部回転糸切り		内面: 5Y5/1 外面: 5Y5/1 断面: 2.5Y6/2	M区1層	火礫あり
3	須恵器	坏	(14.9) (10.0) 4.0	口縁1/8 底部3/8	ロクロ	→底部回転糸切り 外面: 底部手持ちヘラケズリ		内面: N5/0 外面:2.5GY5/1 断面: N5/0	I区1層	火礫あり
4	須恵器	坏	16.9 11.3 6.3	口縁4/5 底部完形	ロクロ	→底部回転糸切り→高台貼付 外面: 底部回転ヘラケズリ		内面:2.5Y R5/4 外面: N4/0 断面:2.5Y R4/1	II区4層	
5	須恵器	甕	— — <21.3>	底部完形	ロクロ	内面: 同心円文→叩き目→底部ナデ (刷毛状工具) 外面: 叩き目		内面: 7.5Y6/1 外面:7.5GY7/1 断面: N7/0	カマド袖 I区床面	



第33図 H 6号住居址出土石器（1：4）

表10 H 6号住居址出土石器観察表

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
6	支脚石	軽石	29.4	15.1	13.9	1400	カマド	
7	支脚石	軽石	26.0	12.9	11.2	970	カマド袖 Ⅲ区床面	

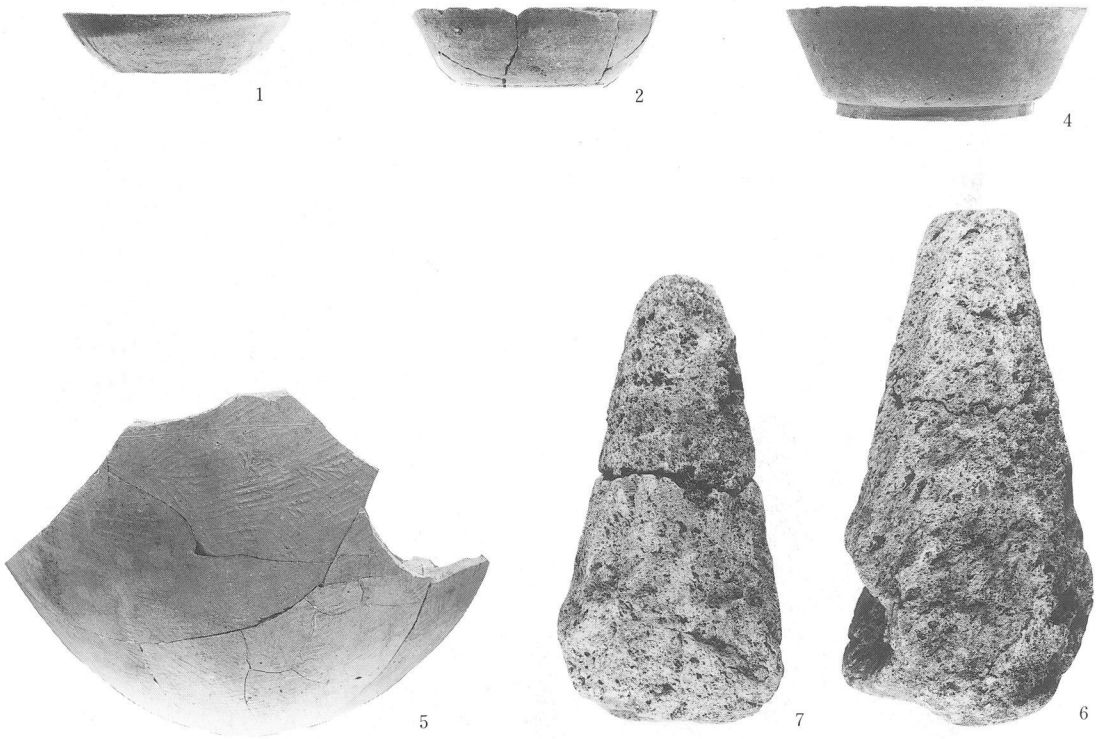


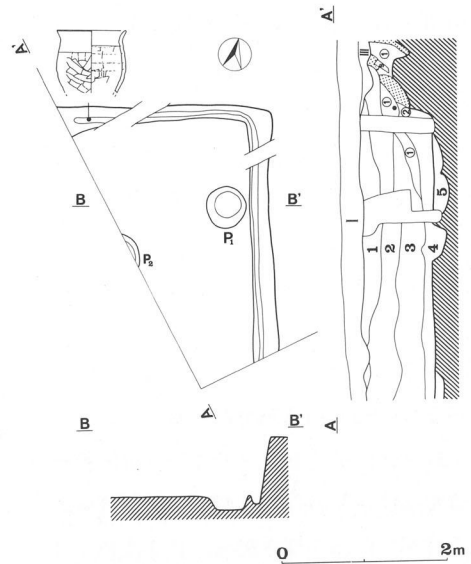
写真33 H 6号住居址出土遺物

(7) H 7 号住居址

古墳時代

H 7 号住居址は、第Ⅱ区Jい 8・9 グリッドにおいて検出された。大半が発掘区外にあり、北東隅の調査に止まった。また、耕作溝で壁・床面が一部破壊されている。平面形態は隅丸方形を呈したと思われる。Ⅲ層中から掘り込まれており、壁は100度の急傾斜で立ち上がる。壁高は70cm程を測る。幅 8～13cm、深さ 3～13cmのU字状をなす周溝が壁直下を巡る。床面はロームを混ぜた黒色土（5層）で貼られていた。ピットは東壁際のP 1（51×48cm、深さ17cm）と支柱穴と考えられるP 2の一部が確認された。なお、Aセクションでカマドの覆土が確認されており、カマドは北壁中央に位置し、白色粘土を構築材に用いたものと想定される。覆土は黒褐色土（1・2層）、暗褐色土（3層）、褐色土（4層）である。また、カマド部分に白色粘土ブロックを含む灰黄褐色土（①層）、褐色土（②層）がみられた。

出土した遺物は少ないが、古墳時代後期の土器と考えられる土師器甕（1）がカマド①層から、多孔の土師器甕底部破片（2）が3層から出土している。



第34図 H 7 号住居址実測図（1：80）

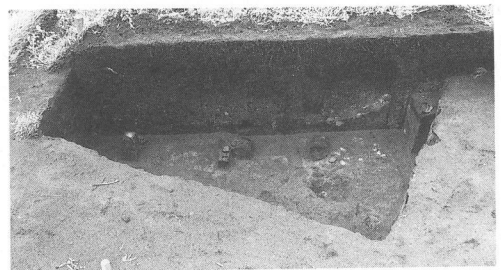
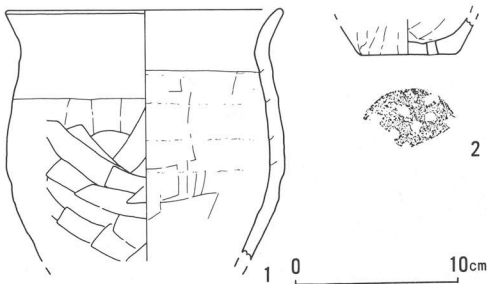


写真34 H 7 号住居址



第35図 H 7 号住居址出土土器（1：4）

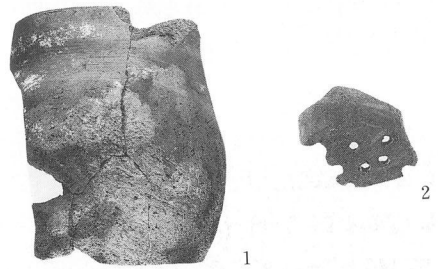


写真35 H 7 号住居址出土遺物

表11 H 7 号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調	整	色調	出土位置	備考
1	土師器	甕	(16.8) — <15.3>	口縁1/4	非ロクロ	内面：胴部ヘラナデ→口縁ヨコナデ 外面：胴部ナデ後ヘラケズリ→口縁ヨコナデ		内面：5Y R7/4 外面：5Y R7/4 断面：5Y R7/4	カマド①層	
2	土師器	甕	(5.8) <2.2>	底部1/3	非ロクロ	内面：ヘラナデ 外面：胴部ナデ・底部ヘラケズリ		内面：2.5Y R6/2 外面：N4/0 断面：2.5Y R6/2	3層	

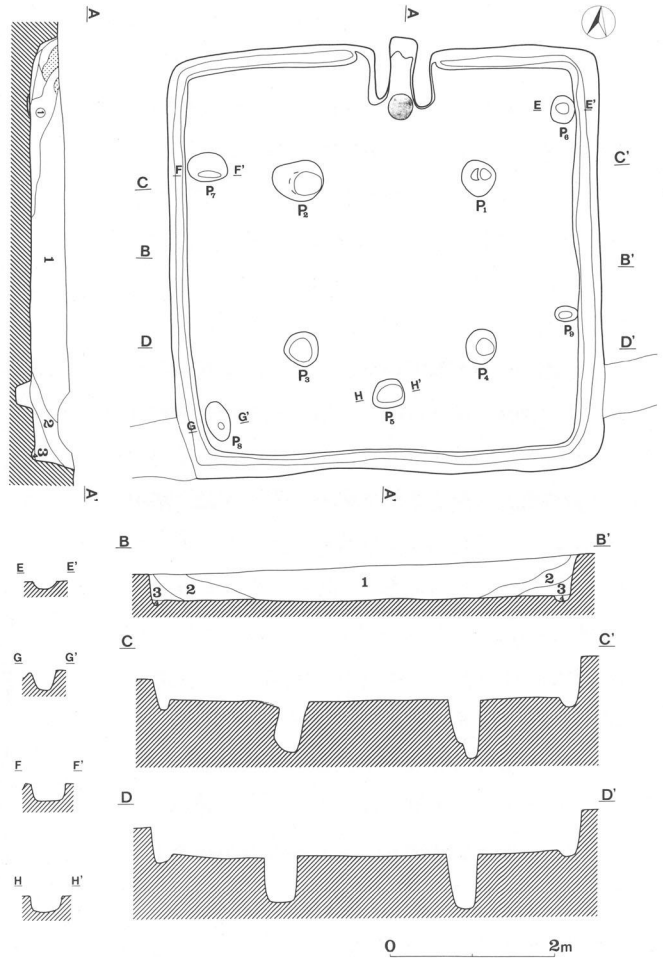
(8) H 8 号住居址

古墳時代

H 8 号住居址の検出位置は、第Ⅱ区 E け・こ 9 グリッドである。M 1 号溝状遺構によって壁の一部が破壊されている。

平面形態は、南北 5.1m、東西 5.2m の整った隅丸方形を呈し、床面積は 24.5m² である。主軸方向は N-12°-W を指す。壁は垂直に立ち上がり、確認面からの壁高 30~50cm 程で、西壁が浅い。これは農道による削平に起因する。壁直下に幅 10~24cm、深さ 2~12cm の周溝が全周する。

支柱穴は 4 個 (P 1~P 4) で規則的な配置をなす。P 1 は 44×42cm、深さ 71cm、P 2 は 50×62cm、深さ 63cm、P 3 は 43×41cm、深さ 55cm、P 4 は 43×38cm、深さ 67cm を測る。また、南壁中央部に 34×40cm、深さ 20cm の出入口部関連のピットと思われる P 5 が確認されている。さらに、33×30cm、深さ 11cm の P 6 と 20×28cm、深さ 18cm の P 9 が東壁際に間隔をあけて並び、36×47cm、深さ 21cm の P 7 と 49×28cm、深さ 23cm の P 8 が西壁際に間隔をあけて並んでいた。両者の位置関係は南北にずれるが、ピット間の間隔は東西壁ではほぼ同じである。



第36図 H 8 号住居址実測図 (1 : 80)



写真36
H 8 号住居址

覆土は、周溝の堆積が黒褐色土の4層であり、壁際の堆積に褐色土の2層と黒色土の3層がみられた。なお、住居中央の堆積は暗褐色土の1層のみであった。

カマド

北壁中央に位置する。農道により削平されていたが、地山造り出しの袖部が馬蹄形状に残されていた。煙道部は壁を半楕円形状に緩い傾斜で掘り込んだものであろう。袖部には、灰白色粘土の付着が僅かにみられた。焚口部では、皿状の掘り方と、両袖先端に袖石埋め込み用と考えられる小ピットが確認された。

カマド覆土は、カマド上面から前面の床面までを覆う灰白色粘土ブロック・粒子を含む灰黄褐色土(①層)、天井部の崩落を示す灰白色粘土ブロック、カマド内を埋める褐色土(②層)、灰白色粘土粒子を含む灰黄褐色土(③層)、灰白色粘土粒子・炭化物片・灰を多量に含む灰黄褐色土(④層)である。なお⑤層は、灰白色粘土を多量に含む粘質土で、煙道部形成時に貼られた構材と思われる。

遺物

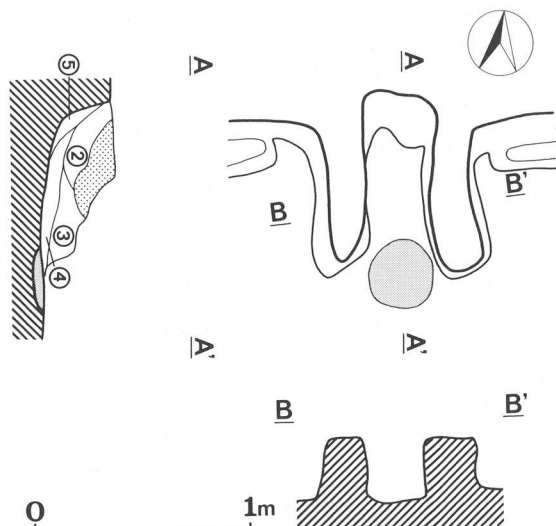
検出された主要遺物は、土師器坏・鉢・甕、土製勾玉、編物石である。また、住居中央部の床面には大小に割られた溶結凝灰岩の集石が存在していた(写真38)。火を顕著に受けたものも存在するが、カマド等に関連するものかどうかは定かではない。

1は底部近くに稜を有し、内面が黒色処理された土師器坏の底部破片である。Ⅳ区1層から検出されている。

2は土師器小形鉢と考えられるもので、平底の底部には木葉痕を有する。南壁際周溝上部の3層から出土した完形品である(写真39)。

3はヘラミガキが施された土師器球胴甕の口縁部破片で、Ⅲ区1層から検出されている。

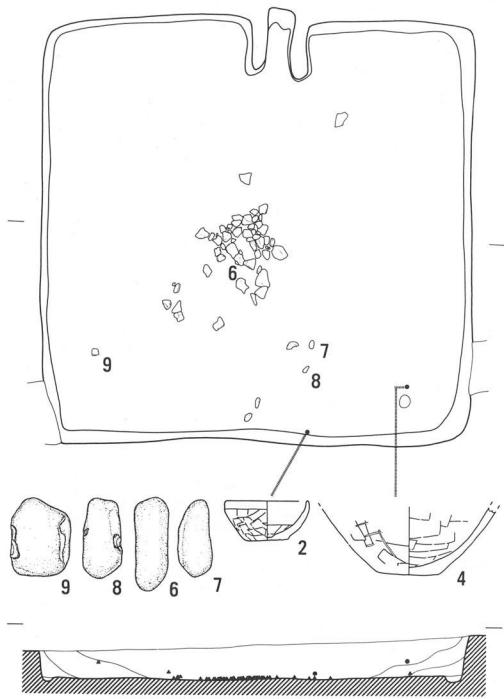
4は、球胴形を呈する土師器甕の底部破片と思われる、ヘラケズリ後にヘラミガキが施されている



第37図 H 8号住居址カマド実測図(1:30)



写真37 H 8号住居址カマド



第38図 H 8号住居址遺物分布図

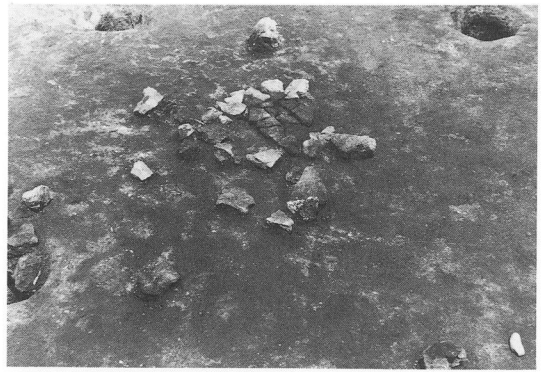


写真38 集石出土状態

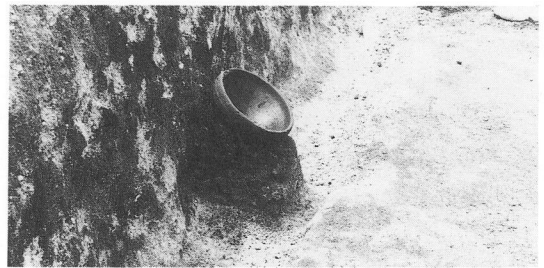
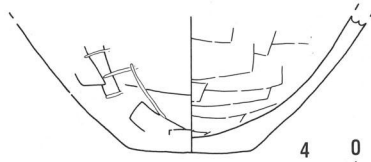
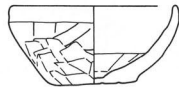
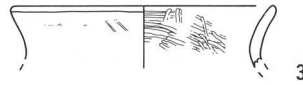
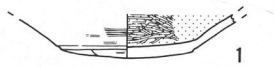


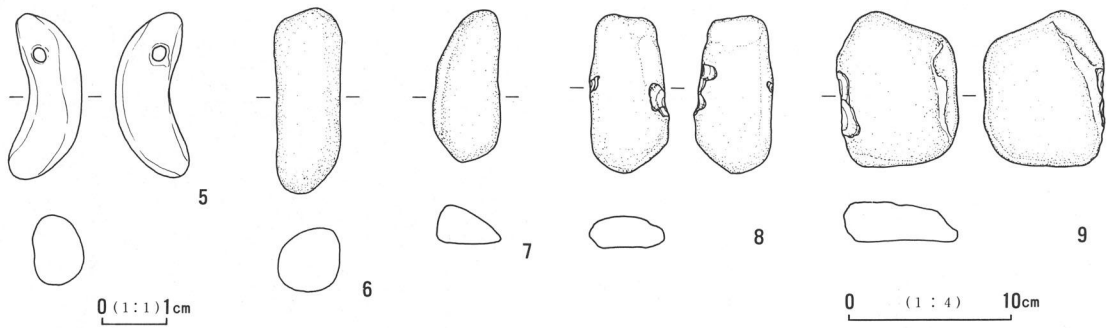
写真39 土器 2 出土状態



第39図 H 8号住居址出土土器 (1 : 4)

表12 H 8号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調	整	色調	出土位置	備考
1	土師器	坏	— (8.2) < 2.7)	底部1/4	非ロクロ	内面：ヘラミガキ→黒色処理 外面：体部ヨコナデ・底部ヘラケズリ→ヘラミガキ		外面：7.5Y R6/4 断面：10Y R8/3	N区1層	
2	土師器	鉢	10.3 5.3 4.9	完形	非ロクロ	内面：みこみ部ヘラナデ→口縁ヨコナデ 外面：体部・底部ヘラケズリ後ナデ→口縁ヨコナデ		内面：5 Y R4/1 外面：7.5 Y R4/1	N区3層	木葉痕あり
3	土師器	甕	(16.2) — < 3.8)	口縁1/4	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ→ヘラミガキ 外面：口縁ヨコナデ→ヘラミガキ		内面：10Y R4/1 外面：7.5Y R6/4 断面：7.5Y R6/4	Ⅲ区1層	
4	土師器	甕	— 7.4 < 8.3)	底部完形	非ロクロ	内面：ヘラナデ 外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ		内面：5 Y R6/4 外面：5 Y R6/6 断面：5 Y R6/6	N区2層	



第40図 H 8号住居址出土石器・土製品

表13 H 8号住居址出土石器・土製品観察表

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
5	勾玉	土製品	2.5	0.9	1.0	2.2	Ⅳ区1層	
6	編物石	安山岩	11.4	4.2	4.0	280	Ⅲ区床面	
7	編物石	流紋岩	9.4	4.3	2.3	120	Ⅳ区床面	
8	編物石	輝石 安山岩	9.7	4.9	2.0	140	Ⅳ区床面	両側縁に ノッチ状加工
9	編物石	輝石 安山岩	9.6	7.5	2.5	260	Ⅲ区2層	一側縁に ノッチ状加工

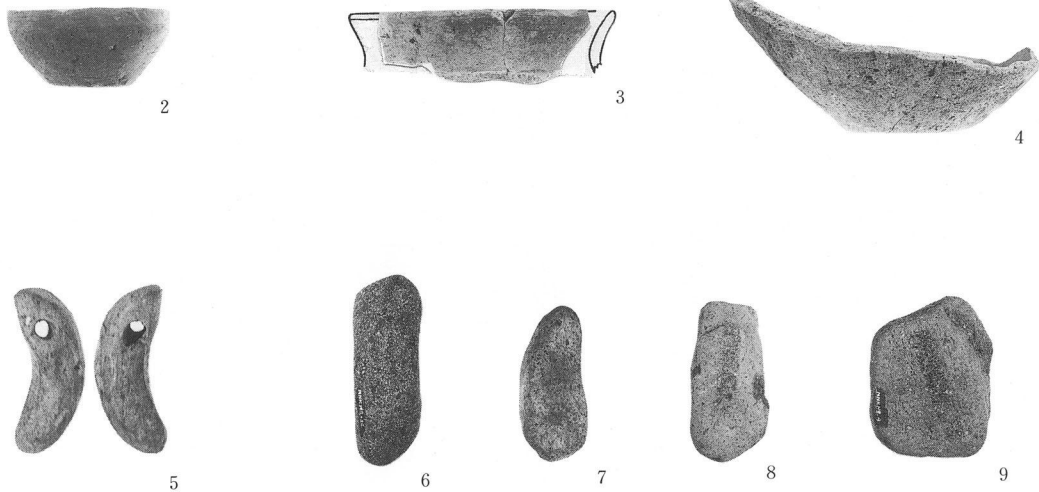


写真40 H 8号住居址出遺物

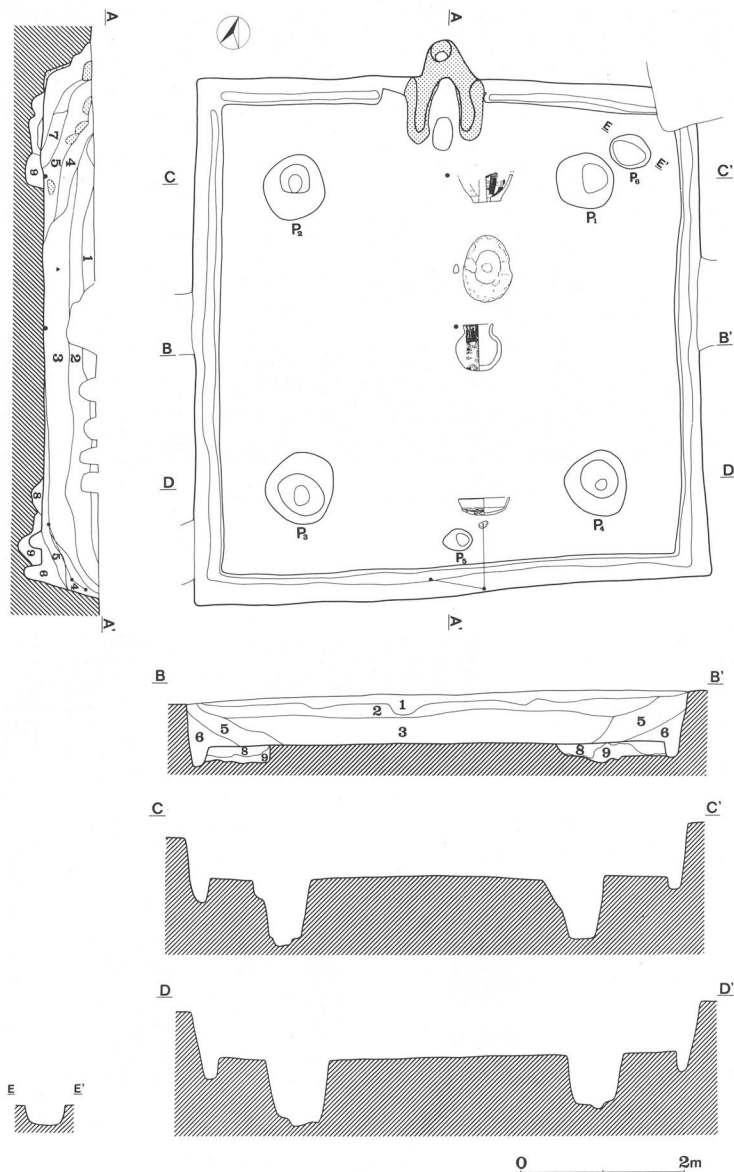
る。南東隅の2層から出土している。

5は、土製勾玉でⅣ区1層の出土。

6～9は編物石と考えられる河原石である。6・7には加工・使用痕はみられないが、8では両側縁の表裏面に、9では一側縁の表裏面にノッチ状の加工が施されている。6は集石内に含まれ、

7・8はⅣ区の床面、9はⅢ区の2層から出土している。

以上のように、H 8号住居址から検出された遺物は少ないが、土師器杯・甕の特徴は、古墳時代後期の土器様相と理解でき、カマドの構造も古墳時代後期の在り方を示している。



第41図 H 9 号住居址実測図 (1 : 80)

H 9 号住居址は、第Ⅱ区Eき・く8・9グリッドより検出された。北東コーナーがH10号住居址で破壊され、東西壁中央上部がM1号溝状遺構によって、西壁南端上部がM2号溝状遺構によって破壊されている。

平面形態は、南北6.3m、東西6.1mの方形を呈

する。床面積は約33.7㎡であり、本遺跡検出の竪穴住居址では最大規模を有する。主軸方向はN-13°-Wを指す。

壁は垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は最大68cmを有する。壁直下に幅9~20cm、深さ10~31.5cmの深い周溝が存在し、北西隅を除いて全周



写真41 H 9号住居址

する。形状はU字形を呈するが、床面からの掘り込みは垂直である。

床面は中央部がローム面、周辺部が黒色土（9層）とロームを混ぜた黒色土（8層）で構築されている。

支柱穴は4個（P1～P4）で、やや壁よりに等間隔に配置されている。掘り方は大形で2段の掘り込みからなる。P1は70×70cm、深さ72cm、P2は78×75cm、深さ80cm、P3は87×82cm、深さ81cm、P4は80×75cm、深さ64cmを測る。また、南壁中央際で27×36cm、深さ21cmの出入口部関連のピットと思われるP5が確認されている。41×52cm、深さ24cmのP6はP1北脇に位置する。

住居覆土は、6層の黒色土、5層のロームブロックを含む黄褐色土、4層のロームブロックを含む黒褐色土が壁際を埋める覆土であり、住居中央は、1層のローム粒子・パミスを含む暗褐色土、2層のローム粒子・パミスを含む暗褐色土、3層のロームブロック・パミスを含む褐色土の堆積である。なお、1・2層には溝状遺構の他に、耕作の攪乱が部分的に及んでいた。

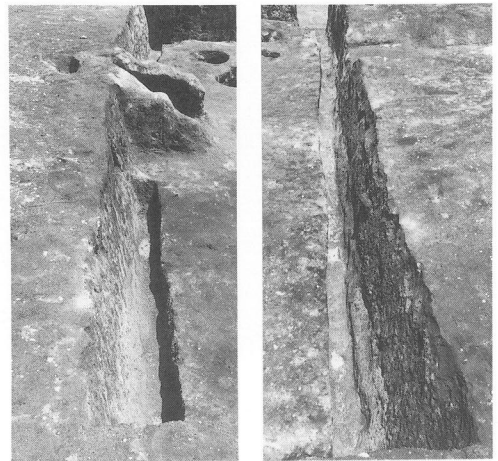


写真42 H 9号住居址周溝

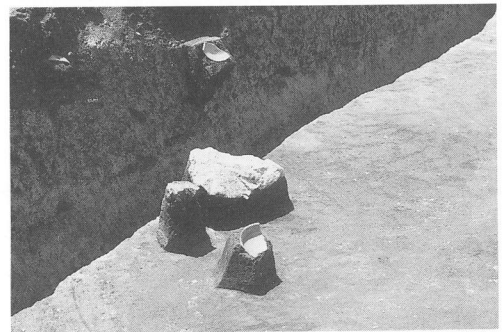
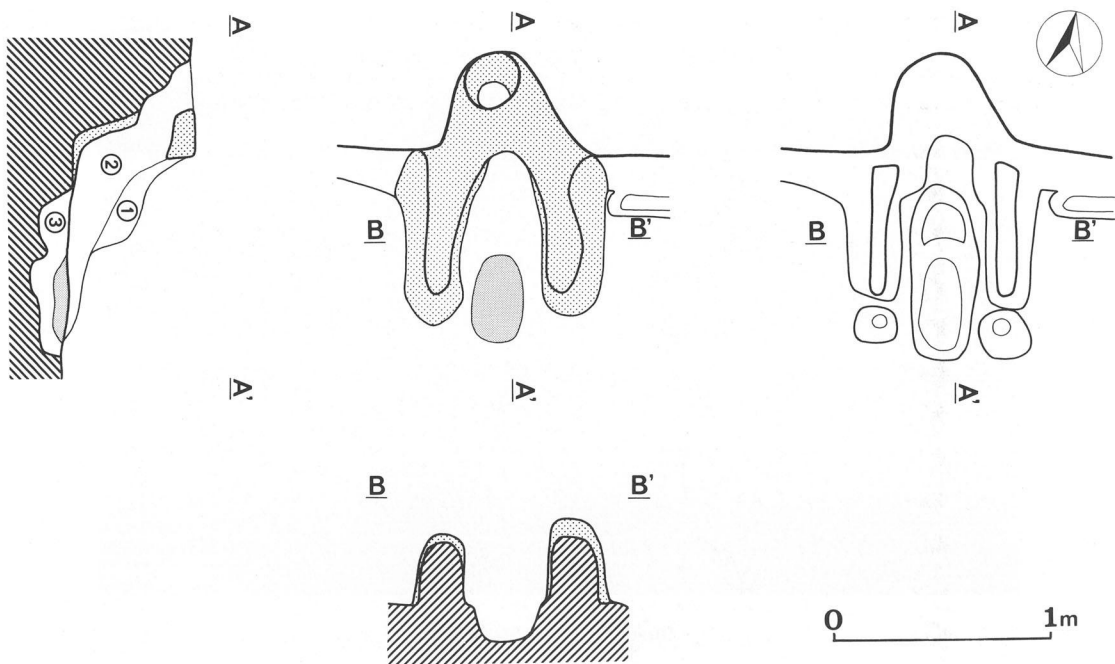


写真43 土器1出土状態



第42図 H9号住居址カマド実測図（1：30）



写真44 H9号住居址カマド

カマド

北壁中央部に構築されていた。焚口～煙道部までの長さは140cm、幅は90cm程である。

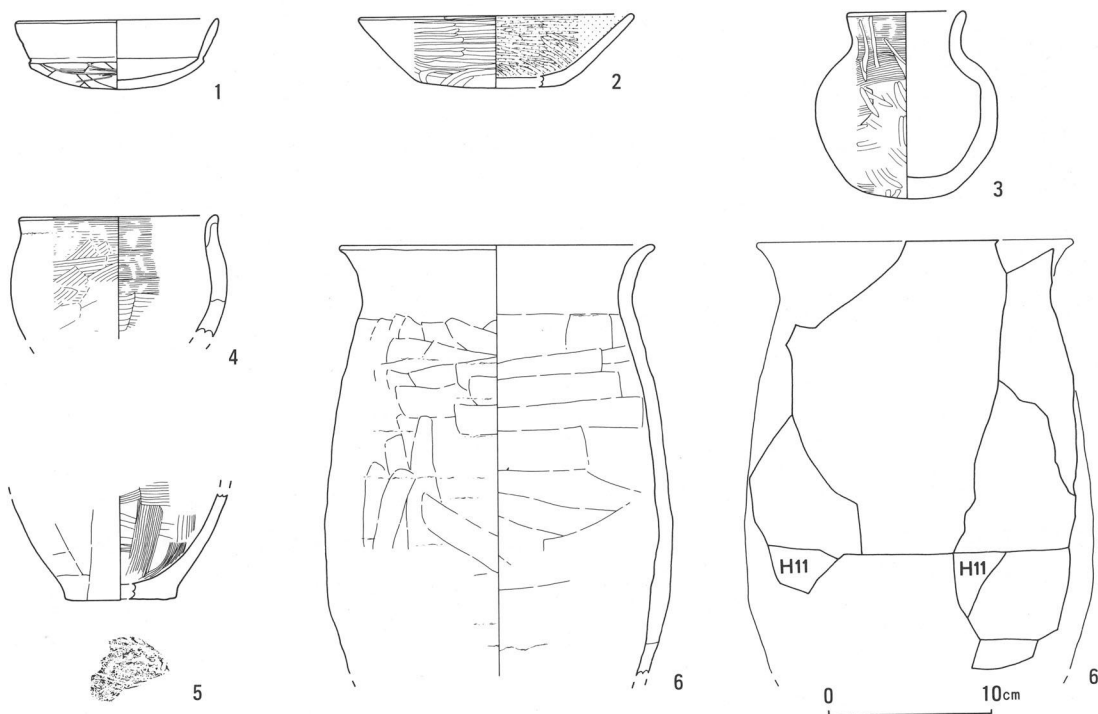
煙道部は、舟先状の2段の掘り込みからなり、煙道立ち上がり部には橙色粘土が貼られていた。

袖部は、地山を馬蹄形に削り出して芯としたものである。天井部の大半は崩落していたが、袖部から煙道部上面に貼られた橙色粘土が一部残存していた。また、両袖先端部では袖石を埋め込むために掘られたと考えられる小ピットが確認された。

火床面には、長楕円形の掘り方があり、ローム

と黒褐色土の混合土（③層）で貼られていた。

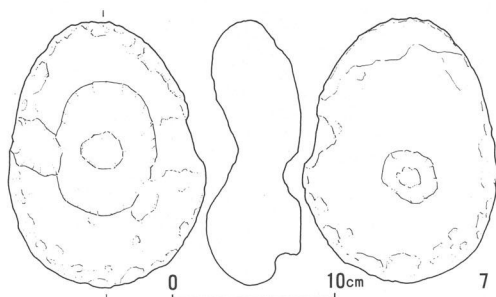
覆土の在り方は、カマド上面から前面の床面に大形の橙色粘土ブロックを含む黄褐色土（5層）の堆積がみられ、カマド前面には褐色土（7層）の堆積、カマド内では、上面に橙色粘土粒子を多量に含む褐色土（①層）、内部に黄褐色土（②層）の堆積がみられた。なお、H2号住居址のカマドの在り方を、本遺跡での古墳時代後期の典型的な構築方法と理解すると、焚口の袖石、天井石が取り除かれた状態にある本址のカマドは、破壊されたものと考えられ、それに対応するように、袖石・



第43図 H9号住居址出土土器(1:4)

表14 H9号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調	整	色調	出土位置	備考
1	土師器	杯	12.4 10.6 4.3	口縁9/10 底部完形	非ロクロ	内面:みこみ部ナデ→口縁ヨコナデ 外面:口縁ヨコナデ→底部ヘラケズリ後ヘラミガキ	内面:2.5YR6/8 外面:2.5YR5/6 断面:5YR7/6		N区4・5層	
2	土師器	杯	16.7 (8.3) 4.5	口縁1/4 底部1/3	非ロクロ	内面:ヘラミガキ→黒色処理 外面:口縁ヨコナデ→底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	外面:7.5YR5/4 断面:7.5YR5/1		Ⅲ区床面	
3	土師器	壺	(7.2) — 11.5	口縁1/2 底部完形	非ロクロ	内面:口縁ヨコナデ・胴部→底部ヘラナデ 外面:口縁ヨコナデ(刷毛状工具)・胴部→底部ナデ→ヘラミガキ	内面:7.5YR5/6 外面:7.5YR6/6 断面:5YR6/6		I区床面	
4	土師器	甕	(12.1) — <7.5>	口縁1/4	非ロクロ	内面:口縁ヨコナデ→胴部刷毛目 外面:口縁ヨコナデ→胴部刷毛目	内面:10YR7/4 外面:10YR5/6 断面:2.5YR6/4		Ⅱ区床面	
5	土師器	甕	— (6.7) <6.4>	底部1/2	非ロクロ	内面:刷毛目 外面:ナデ	内面:10YR4/1 外面:2.5YR5/3 断面:10YR8/3		I区床面	木葉痕あり
6	土師器	甕	(19.2) — <26.3>	口縁1/10 胴部1/4	非ロクロ	内面:口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ 外面:口縁ヨコナデ→胴部ナデ	内面:7.5YR4/1 外面:7.5YR6/4 断面:10YR6/3		カマド②層 Ⅱ区床面 H11Ⅲ区1層	H11と接合



第44図 H9号住居址出土土器(1:4)

表15 H9号住居址出土土器観察表

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
7	凹石	軽石	16.3	12.0	5.9	420	I区3層	

天井石に関連すると思われる安山岩がカマド手前の床面に存在していた。

遺物

H 9号住居址は大形の住居址であったが、検出された遺物量は極めて少なかった。主要遺物としては土師器坏・壺・甕、凹石が検出された。

土師器坏には、外稜を体中央部に有し、口縁部が直線的に外反する須恵器模倣坏（1）、平底を呈し、底部と体部の境に稜を有して体部が外反する内面黒色処理の坏（2）がみられた。1は南壁中央部の4・5層の堆積に即して（写真43）、破片が分布していたものであり、2はⅢ区の床面から検出されている。

3は小形の土師器壺と考えられるもので、住居

中央部の床面から出土したものである。

土師器甕には、Ⅱ区床面から検出された口縁部が短く外反し、胴の張る小形甕（4）、カマド手前の床面から出土した木葉痕を有する球胴甕の底部破片（5）、破片がカマド内からカマド左脇の床面に分布していた肉厚の長胴甕（6）があった。なお、6の長胴甕には、H11号住居址1層から出土した胴部破片2点が接合している。

7は軽石を利用した凹石で、表面に皿状、裏面に小さな凹部を有する。出土位置は住居中央の3層である。

以上のように、H 9号住居址から検出された遺物は少ないが、土師器坏・長胴甕の特徴は、古墳時代後期の土器様相と考えられる。

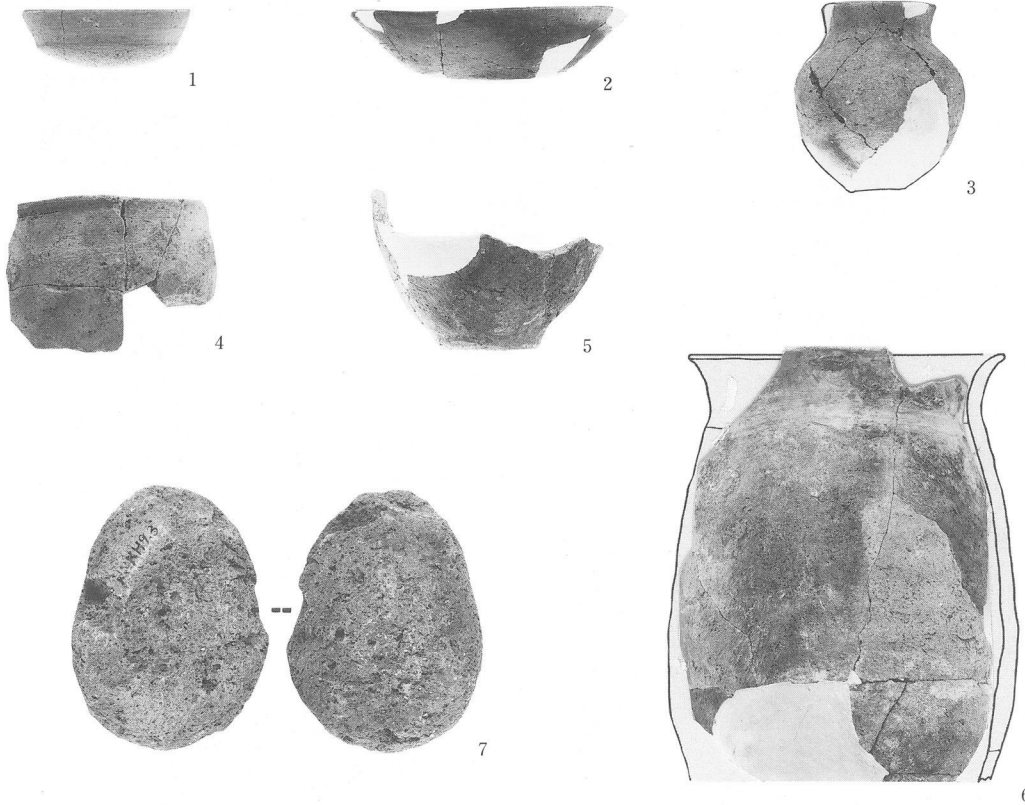


写真45 H 9号住居址出土遺物

(10) H10号住居址

奈良時代

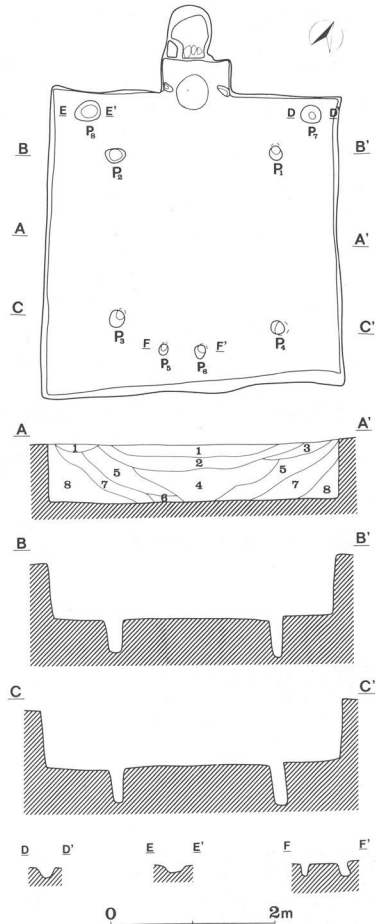
H10号住居址は、第Ⅱ区Eき7・8グリッドより検出された。

平面形態は、コーナーが直角に近い方形を呈し、南北3.7m、東西3.5mを測る。床面積は12.2㎡である。主軸方向はN-25°-Wを指す。

壁は垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は68~75cmと深い。周溝は認められない。

主柱穴は4個で、小形円形を呈するP1~P4が規則的に配置されていた。P1は17×16cm、深さ45cm、P2は17×25cm、深さ39cm、P3は21×18cm、深さ39cm、P4は16×17cm、深さ51cmを測る。また、南壁中央際では、P5・P6が並存していた。共に住居中央側に斜めに掘り込まれており、出入口部施設に関わるものであろう。P5は13×12cm、深さ15cm、P6は16×13cm、深さ17cmを測る。また、北東隅と北西隅の対称的な位置に、22×24cm、深さ13cmのP7と25×32cm、深さ9cmのP8が確認された。

住居覆土は、ブロック単位の土層が繰り返して堆積した状態を示していた。便宜的に次の8層に分層したが、本住居址は廃絶後に人為的に埋め戻されたと考えられる。



第45図 H10号住居址実測図(1:80)

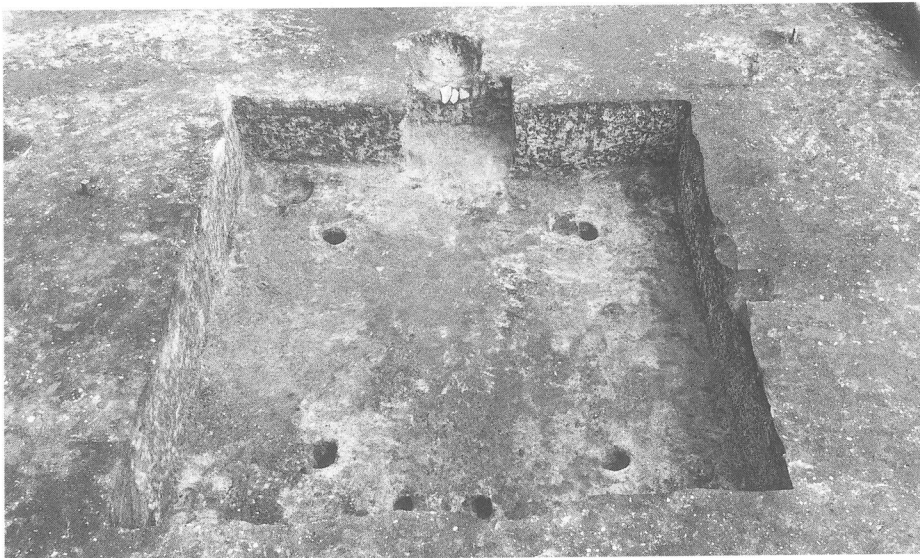


写真46
H10号住居址

1層は暗褐色土。2層はにぶい黄橙色土。3層は暗褐色土。4層は黒褐色土。5層はパミス、ロームブロック、黒色土ブロックを含むにぶい黄橙色土。6層は黒色土。7層はロームブロックを多量に含む暗褐色土。8層は暗褐色土とローム・パミス主体の褐色土の互層である。

カマド

燃焼部は、40×80cm程の規格的な長方形を呈し、北壁中央部の壁外に設置されていた。

煙道部は、燃焼部との境に段を設け、60×50cm程の半楕円形の掘り込みで形成されていた。また、燃焼部との境には須恵器甕の破片3点が設置されていた。火床面では径40cm、厚さ10cm程の焼土の堆積がみられ、袖部では2個の小ピットが壁境の対称的な位置で検出された。

カマド覆土は、構材の橙色粘土ブロック・パミス・ロームブロックを多量に含むにぶい黄褐色土(①層)、橙色粘土ブロック・パミスを含む黒褐色土(②層)、煙道部を埋める黒色土(③層)、橙色粘土ブロック・炭化物片を含むにぶい黄褐色土(④層)であった。

遺物

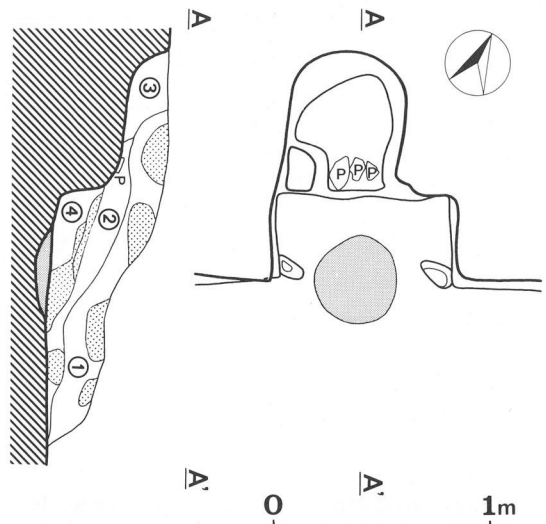
本住居址は埋め戻されていたため、遺物の出土量は極めて少なかったが、カマドを主体に須恵器の坏、土師器の甕が検出された。

1は、手持ちヘラケズリで底部が調整された須恵器坏で、カマド内の覆土から検出された。

2・3は、口縁が「く」の字状に外反する土師器長胴甕である。2はカマド内の覆土とⅡ区の8層に破片が分布していたもので、3はカマド内の覆土から検出された。

4は、偏平な円筒状を呈する「枕」形の土製品である。H3号住居址のものよりは小形で、整形は輪積、叩き締めである。出土位置はカマドであるが、設置された状況は何えなかった。

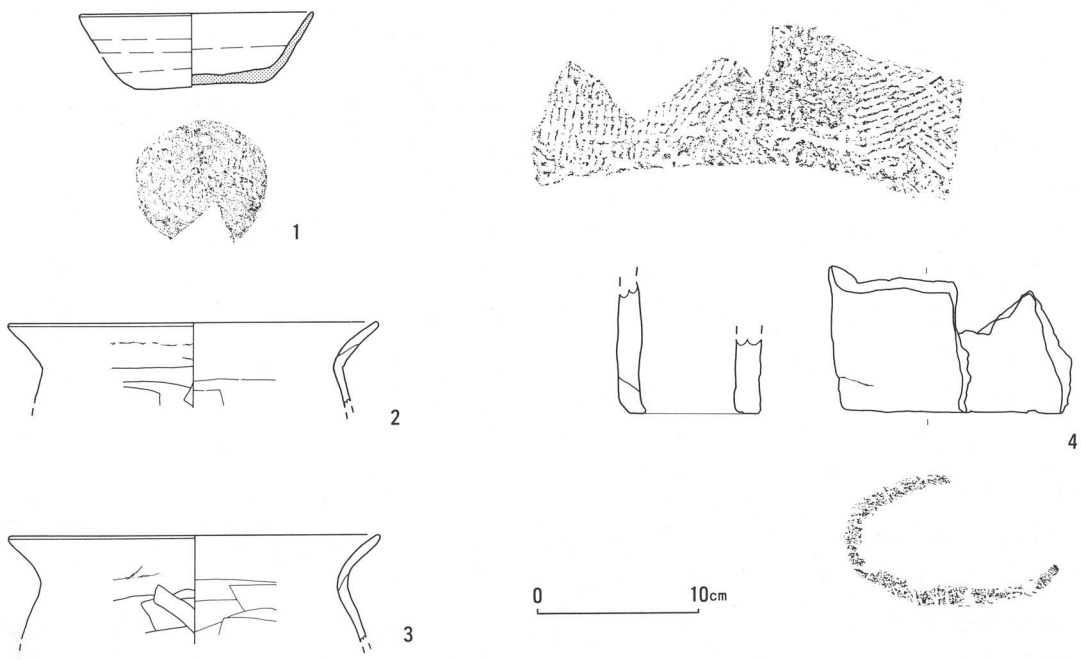
本住居址検出の須恵器坏・土師器長胴甕の特徴と組成は、八世紀第Ⅰ四半期の土器様相と考えられよう。



第46図 H10号住居址カマド実測図(1:30)



写真47 H10号住居址カマド



第47図 H10号住居址出土土器（1：4）

表16 H10号住居址出土土器観察表

挿図 番号	種別	器形	法量	残存	成形	調	整	色調	出土位置	備考
1	須恵器	坏	14.3 8.0 4.6	口縁1/2 底部7/8	ロクロ	→底部切り離し（切り離し方不明） 外面：底部手持ちヘラケズリ		内面： N6/0 外面： N6/0 断面： N6/0	カマド	
2	土師器	甕	(22.6) — < 5.2)	口縁1/3	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ・胴部ヘラナデ 外面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ		内面：2.5Y R6/6 外面： 5 Y R6/4 断面： 10 Y R7/4	カマド Ⅱ区8層	
3	土師器	甕	(22.7) — < 6.7)	口縁1/4	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ・胴部ヘラナデ 外面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ		内面： 5 Y R6/6 外面： 5 Y R5/2 断面： 5 Y R7/6	カマド	
4	土師器		— — < 8.9)		非ロクロ	内面：ナデ 外面：ナデ後叩き目		内面： 10 Y R8/4 外面： 10 Y R7/4 断面： 10 Y R7/4	カマド	

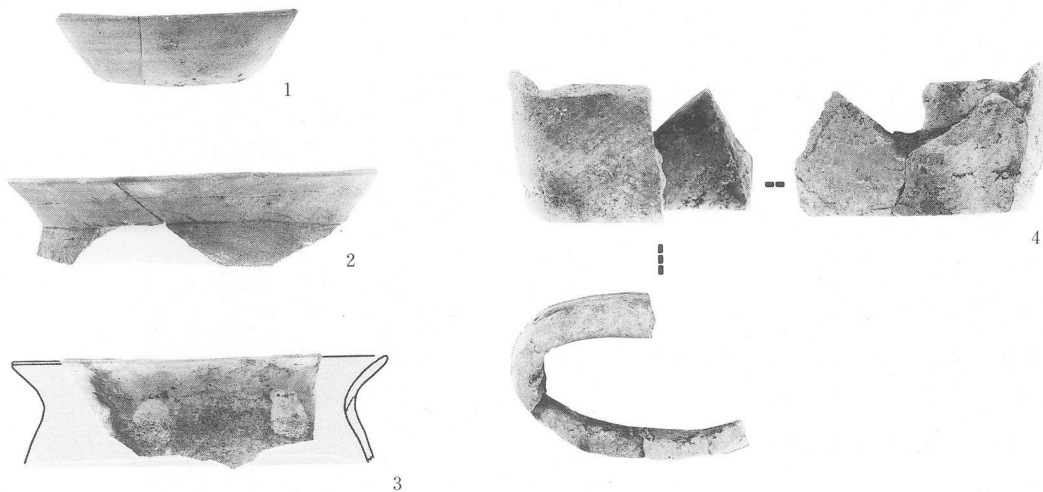


写真48 H10号住居址出土遺物

(11) H11号住居址

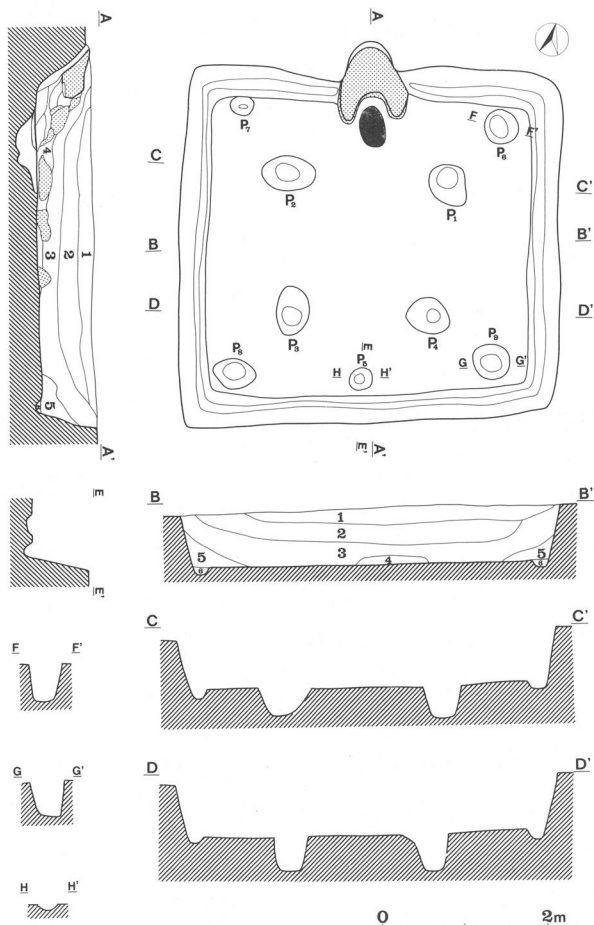
古墳時代

H11号住居址は、第Ⅱ区Eか10グリッドより検出された。

平面形態は、南北4.3m、東西4.6mの隅丸方形を呈し、床面積は16.3㎡である。主軸方向はN-14°-Wを指す。

壁は100度程の急傾斜で立ち上がり、確認面からの壁高は62~67cmである。壁直下に幅10~26cm、深さ6~13cmのU字形を呈する周溝が全周する。

主柱穴は、規則的に配置された4個（P1~P4）である。掘り方はやや大形で、P1は52×46cm、深さ38cm、P2は42×66cm、深さ31cm、P3は59×40cm、深さ41cm、P4は43×55cm、深さ44cmを測る。また、南壁中央際に、26×28cm、深さ7cmを測る出入口部関連のピット（P5）が確認されている。さらに、四隅の均等な位置からP6~P9の4個のピットが検出されている。北東隅のP6は41×42cm、深さ46cmで、南東隅のP9は43×45cm、深さ42cmである。両者は同等の規模を有する。南西隅のP8は37×52cm、深さ19cmで、平面規模でP6・P9と同等であるが、



第48図 H11号住居址実測図（1：80）



写真49
H11号住居址

深さは浅い。北西隅のP 7は23×29cm、深さ12cmと小形で浅いものである。

住居覆土は、暗褐色土（6層）が周溝を埋め、黒色土（5層）が壁際を埋める。住居全体はパミスを多量に含む黒褐色土（1層）・暗褐色土（2層）、黒褐色土（3層）の堆積である。なお、カマド上面から住居中央部の床面までの広範囲に、大形の灰白色粘土ブロックを多量に含む褐灰色土（4層）の分布がみられた。

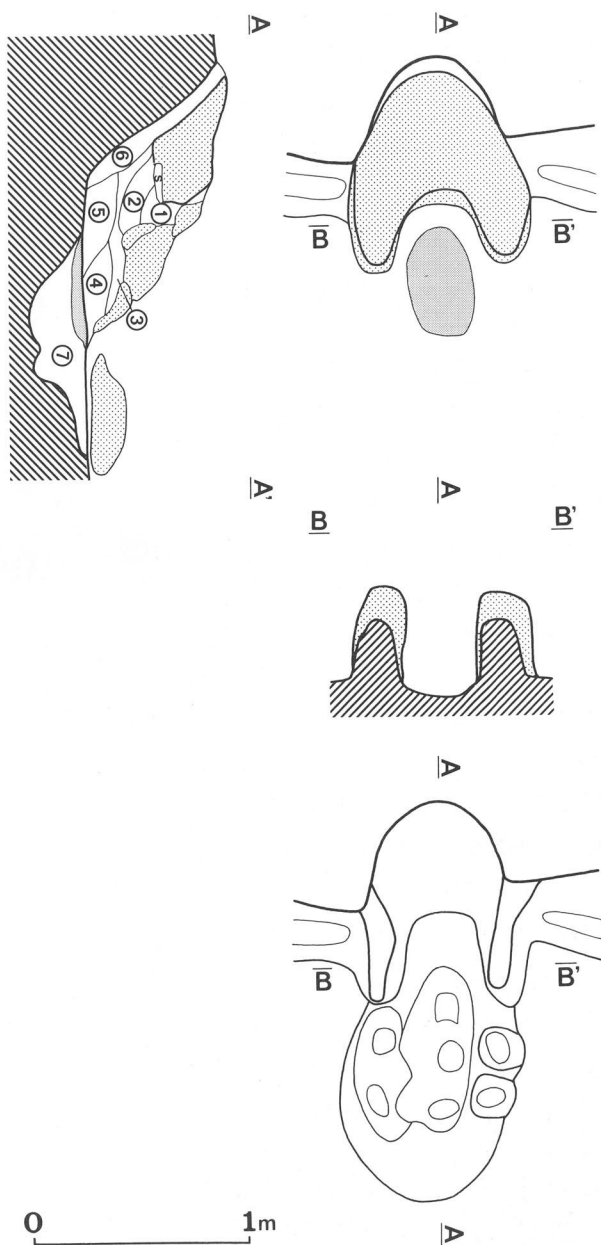
カマド

北壁中央部に位置する。煙道部は半円形状の緩傾斜の掘り込みである。袖部は地山で造り出されたものである。両袖部先端には小ピットがそれぞれ2個確認されている。この在り方は、焚口部を形成する袖石が存在していたことを推定させる。袖部から煙道部にかけて灰白色粘土が貼られた状態で残り、天井部下底に板状礫1個が残されていた。しかし、かなりの量の粘土ブロックが、カマド前面に崩落、流出した状態で分布していることから、上記の在り方が構築時の状態を直接的に示しているものとは断言できない。逆に、袖石が抜き取られた可能性が高いことから、本カマドは破壊されたものと考えられる。なお南壁脇に焼けた大形長方形の安山岩礫2点が分布し、これらは天井石に用いられていた可能性が指摘できる。

カマド内の覆土は、細分すれば褐色土（①層）、灰褐色土（②層）、暗褐色土（③層）、炭化物片を多く含む明黄褐色土（④層）・褐色土（⑤層）、煙道部を埋める暗褐色土（⑥層）、火床面の長楕円形の掘り方を貼ったローム混入の黒色土（⑦層）である。

遺物

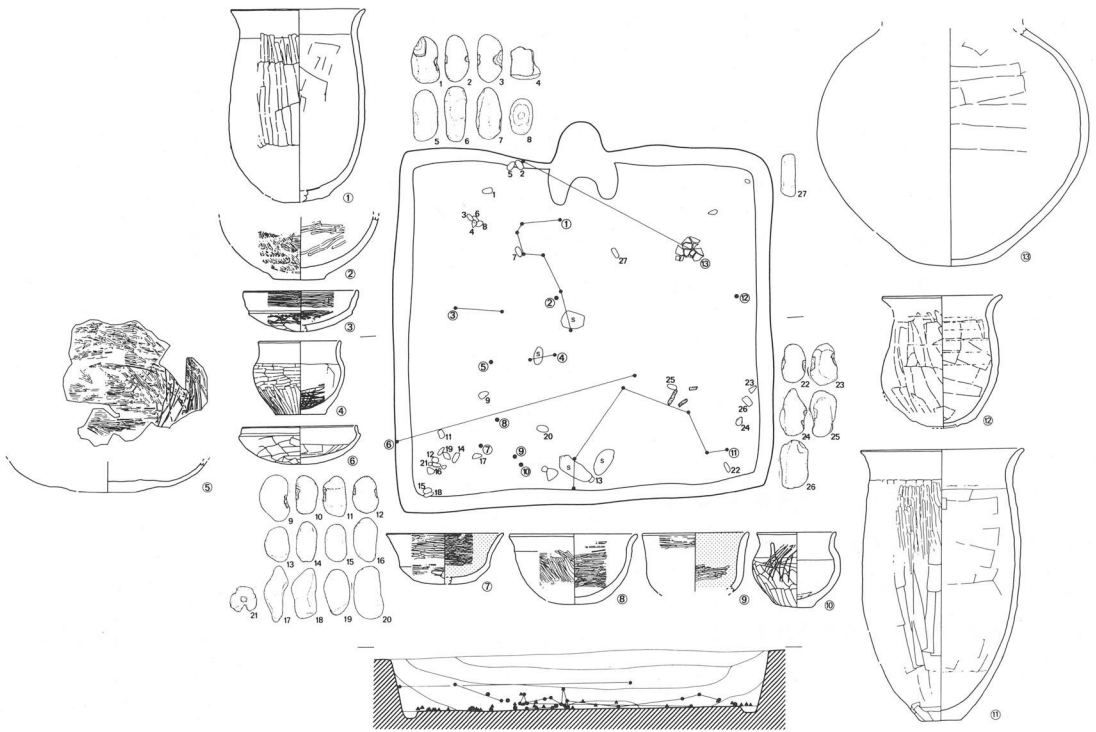
遺物は、古墳時代後期の土器様相を顕著に示す土師器杯・鉢・甕と編物石、凹石、紡錘車が検出されている。



第49図 H11号住居址カマド実測図（1：30）



写真50 H11号住居址カマド



第50図 H11号住居址遺物分布図

土師器坏には、稜を上部に有し口縁部が短く内傾する須恵器模倣坏（1）、稜を中央部に有し口縁部が外傾する坏（2）、稜を下部に有し口縁部が外湾する内面黒色処理の坏（3）がある。1はⅣ区2層と西壁5層出土の破片が接合したもので、2はⅡ区3層、3は西南隅床面から検出された。

4・5は、ヘラミガキが施された土師器鉢である。4は内面黒色処理が施され、坏と同様な調整を見せる。西南隅の床面（5）と3層（4）から検出されている。

土師器甕には、平底で球胴を呈する小形甕（6・7）、大小の長胴甕（8～10）、ヘラミガキが施された球胴甕（11～14）がある。6は南西隅5層、7は住居中央床面、8は東壁脇の5層から検出されている。9はカマド手前から住居中央の4層中に破片が分布していたもの。10は南東隅の3・5層中に破片が分布していたものである。11はⅠ区3層、12は住居中央3層の出土。13はP1脇の床面に破片の集中部がみられたもの。14はⅢ区3層に破片が分布し、H12号住居址から出土した2点

の小破片が接合したものである。

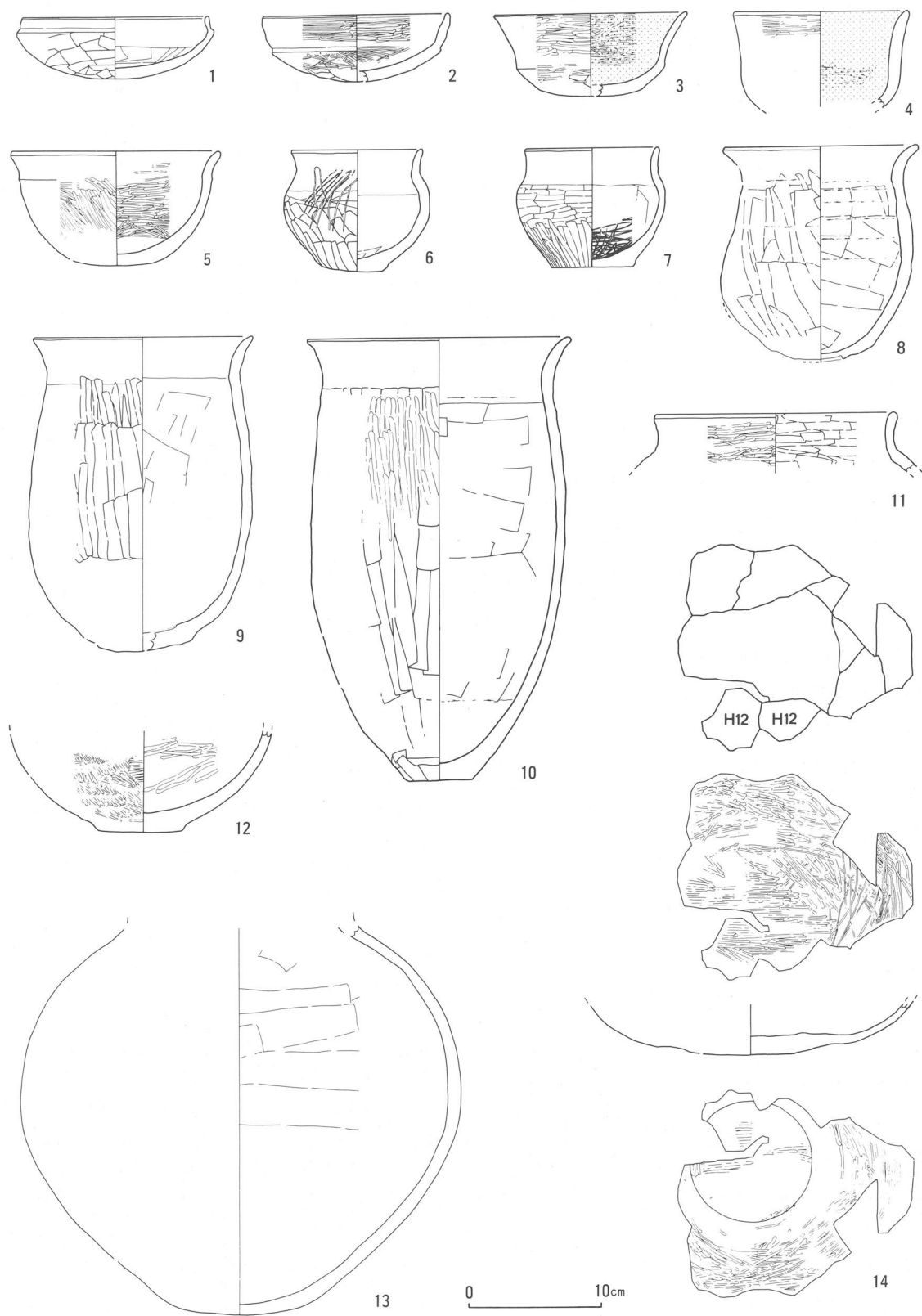
15～41は編物石と考えられるものである。15～23は側縁の両方あるいは片方にノッチ状の加工が施されている。平均重量は376gである。分布には南西隅、北西隅、南東隅の3箇所集中部が存在し、特に南西隅の集中は顕著であった。

42は軽石を用いた紡錘車で南西隅集中部に含まれていた。

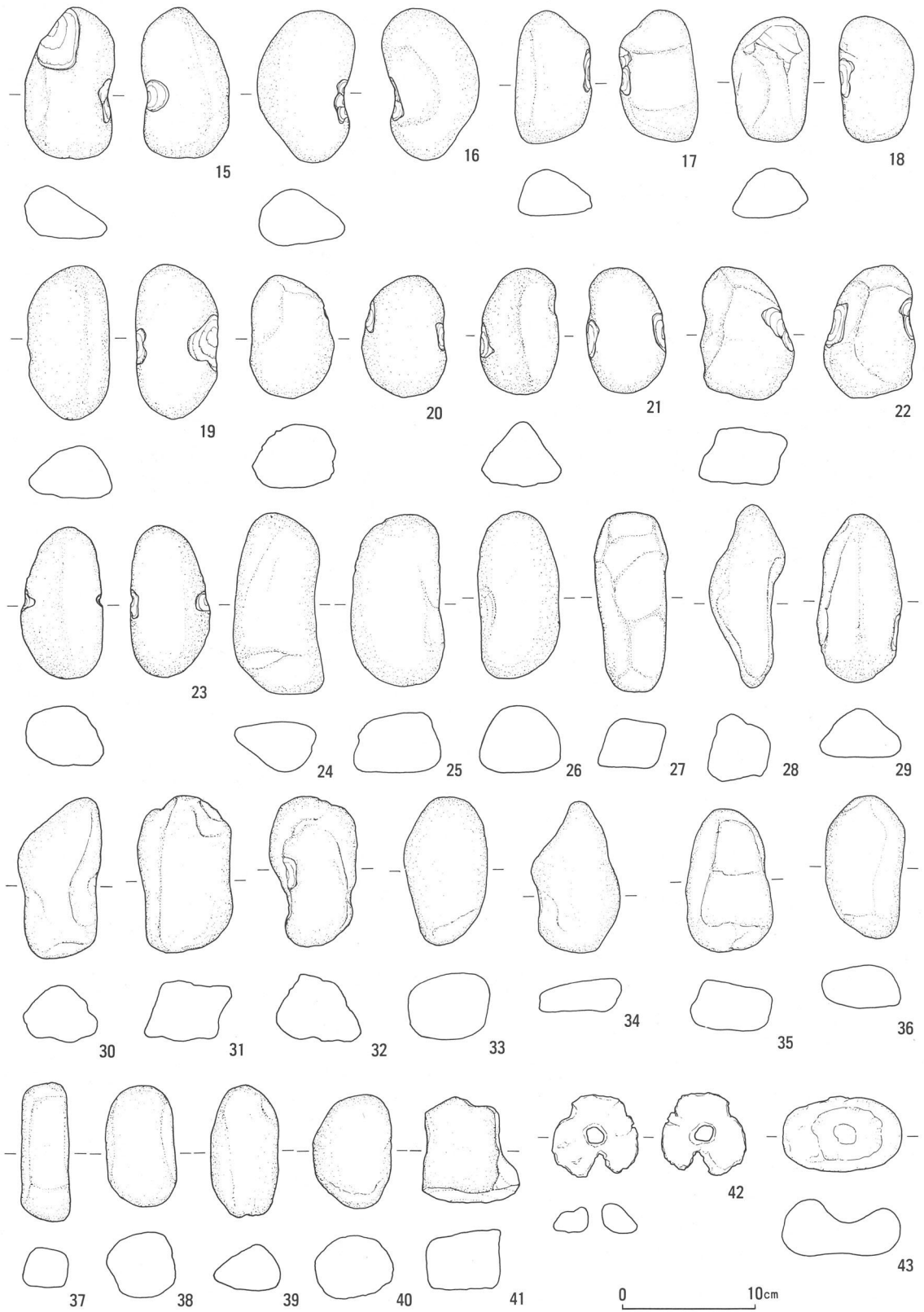
43は軽石を用いた凹石で北西隅の集中部から出土している。



写真51 編物石出土状態（西南隅）



第51图 H11号住居址出土土器 (1:4)



第52图 H11号住居址出土石器 (1 : 4)

表17 H11号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調整	色調	出土位置	備考
1	土師器	坏	(14.0) — 4.6	口縁～ 底部1/3	非ロクロ	内面:みこみ部ヘラナデ→口縁ヨコナデ 外面:体部～底部ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	内面: 5 Y R5/3 外面: 5 Y R7/4 断面: 5 Y R7/4	Ⅲ区5層 Ⅳ区2層	
2	土師器	坏	(14.0) — 5.0	口縁1/3 底部完形	非ロクロ	内面:みこみ部ナデ→口縁ヨコナデ→ヘラミガキ 外面:体部～底部ヘラケズリ→口縁ヨコナデ→ヘラミガキ	内面: 5 Y R6/4 外面: 5 Y R6/4 断面: 7.5 Y R7/4	Ⅱ区3層	
3	土師器	坏	(14.3) (7.8) 6.2	口縁2/3 底部1/2	非ロクロ	内面:口縁ヨコナデ・みこみ部ナデ→ヘラミガキ→黒色処理 外面:口縁ヨコナデ・体部～底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	外面:7.5 Y R5/1 断面: 10 Y R6/3	Ⅲ区床面	
4	土師器	鉢	(13.0) — < 7.3)	口縁1/5	非ロクロ	内面:ヘラミガキ→黒色処理 外面:ヘラミガキ	内面: 5 Y R6/6 断面: 10 Y R6/2	Ⅲ区3層	
5	土師器	鉢	(15.8) (7.0) 8.5	口縁1/3 底部3/4	非ロクロ	内面:口縁ヨコナデ→胴部ナデ→ヘラミガキ 外面:口縁ヨコナデ→胴部～底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	内面: 5 Y R7/4 外面: 5 Y R7/4 断面: 7.5 Y R7/4	Ⅲ区床面	
6	土師器	甕	9.8 4.8 9.1	完形	非ロクロ	内面:胴部ヘラナデ→口縁ヨコナデ 外面:胴部ナデ後ヘラケズリ→口縁ヨコナデ →部分的にヘラミガキ	内面:7.5 Y R5/2 外面:2.5 Y R6/4	Ⅲ区5層	
7	土師器	甕	10.0 6.0 9.0	口縁1/4 底部完形	非ロクロ	内面:胴部ヘラナデ→口縁ヨコナデ→ヘラミガキ 外面:胴部ナデ→口縁ヨコナデ	内面: 5 Y R4/1 外面: 5 Y R4/1 断面:7.5 Y R7/4	Ⅲ区床面	
8	土師器	甕	14.4 (4.1) (15.9)	口縁1/4	非ロクロ	内面:口縁ヨコナデ→胴部～底部ヘラナデ 外面:口縁ヨコナデ→胴部～底部ナデ	内面: 5 Y R4/1 外面: 5 Y R5/1 断面: 5 Y R4/1	I区5層	
9	土師器	甕	16.3 6.9 23.6	口縁完形 底部1/2	非ロクロ	内面:胴部ヘラナデ→口縁ヨコナデ 外面:口縁ヨコナデ→胴部～底部ナデ	内面: 5 Y R6/4 外面:5 Y R6/4.5/1 断面: 5 Y R6/4	Ⅱ区4層	
10	土師器	甕	19.6 4.8 33.1	口縁3/4 底部完形	非ロクロ	内面:胴部～底部ヘラナデ→口縁ヨコナデ 外面:胴部ヘラケズリ後部分的にヘラミガキ 底部ナデ→口縁ヨコナデ	内面: 5 Y R6/3 外面: 5 Y R6/3 断面: 5 Y R6/4	Ⅲ区5層 Ⅳ区3・5層	
11	土師器	甕	(18.0) — < 4.5)	口縁1/4	非ロクロ	内面:ナデ 外面:ヘラミガキ	内面: 5 Y R5/4 外面: 5 Y R5/4 断面: 5 Y R5/4	I区3層	
12	土師器	甕	6.1 < 7.7)	底部完形	非ロクロ	内面:ナデ→ヘラミガキ 外面:ヘラミガキ	内面:7.5 Y R4/1 外面: 10 Y R7/3	Ⅱ区3層	
13	土師器	甕	8.5 (28.9)	底部7/10	非ロクロ	内面:ヘラナデ 外面:ヘラミガキ	内面: 5 Y R7/4 外面:7.5 Y R6/3 断面: 10 Y R8/3	I区床面 Ⅱ区5層	
14	土師器	甕	— (9.0) < 3.8)	底部完形	非ロクロ	内面:ヘラミガキ 外面:ヘラミガキ	内面: 5 Y R5/4 外面: 5 Y R5/3 断面: 5 Y R5/3	Ⅲ区3層 H12 I区3層 H12Ⅳ区床面	H12と接合

表18 H11号住居址出土石器観察表

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考	挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
15	縄物石	角閃石 安山岩	11.3	6.2	4.2	350	Ⅱ区4層	側縁に ノッチ状加工	30	縄物石	角閃石 安山岩	15.1	6.2	4.4	440	Ⅲ区床面	
16	縄物石	輝石 安山岩	11.3	7.4	4.7	485	Ⅲ区床面	側縁に ノッチ状加工	31	縄物石	角閃石 安山岩	11.9	7.0	4.9	520	Ⅳ区床面	
17	縄物石	石英 安山岩	9.9	5.9	4.7	300	Ⅲ区床面	側縁に ノッチ状加工	32	縄物石	石英 安山岩	11.3	7.5	5.0	380	Ⅳ区床面	
18	縄物石	輝石 安山岩	9.4	5.7	4.0	280	Ⅲ区床面	側縁に ノッチ状加工	33	縄物石	石英 安山岩	11.1	6.1	5.0	500	Ⅲ区床面	
19	縄物石	石英 安山岩	11.6	6.2	3.9	360	Ⅱ区床面	両側縁に ノッチ状加工	34	縄物石	安山岩	11.5	6.6	2.5	240	Ⅳ区床面	
20	縄物石	石英 安山岩	9.1	6.2	4.6	200	Ⅲ区床面	両側縁に ノッチ状加工	35	縄物石	安山岩	10.8	6.4	4.8	410	I区2層	
21	縄物石	石英 安山岩	9.4	6.0	5.2	310	Ⅳ区床面	両側縁に ノッチ状加工	36	縄物石	角閃石 安山岩	10.7	5.9	3.9	320	Ⅲ区床面	
22	縄物石	輝石 安山岩	10.0	6.9	5.7	440	Ⅳ区床面	両側縁に ノッチ状加工	37	縄物石	輝石 安山岩	10.4	3.7	2.9	200	I区4層	
23	縄物石	石英 安山岩	11.4	6.1	4.6	420	Ⅱ区4層	両側縁に ノッチ状加工	38	縄物石	石英 安山岩	9.1	5.4	4.9	340	Ⅲ区床面	
24	縄物石	角閃石 安山岩	13.6	6.8	4.0	460	P 7		39	縄物石	輝石 安山岩	9.9	5.2	3.5	225	Ⅲ区床面	
25	縄物石	安山岩	12.3	7.0	5.0	580	Ⅲ区3層		40	縄物石	石英 安山岩	8.6	7.0	4.9	320	Ⅲ区3層	
26	縄物石	角閃石 安山岩	12.5	6.3	5.6	570	Ⅱ区4層		41	縄物石	流紋岩	8.0	7.3	4.8	440	Ⅱ区床面	
27	縄物石	安山岩	13.5	5.5	4.9	270	Ⅱ区床面		42	紡錘車	軽石	6.2	6.4	2.2	20	Ⅲ区床面	孔径15mm
28	縄物石	安山岩	13.5	5.6	4.8	420	Ⅲ区床面		43	凹石	軽石	8.7	5.7	4.3	90	Ⅱ区床面	
29	縄物石	石英 安山岩	12.5	6.2	4.1	370	Ⅱ区4層										

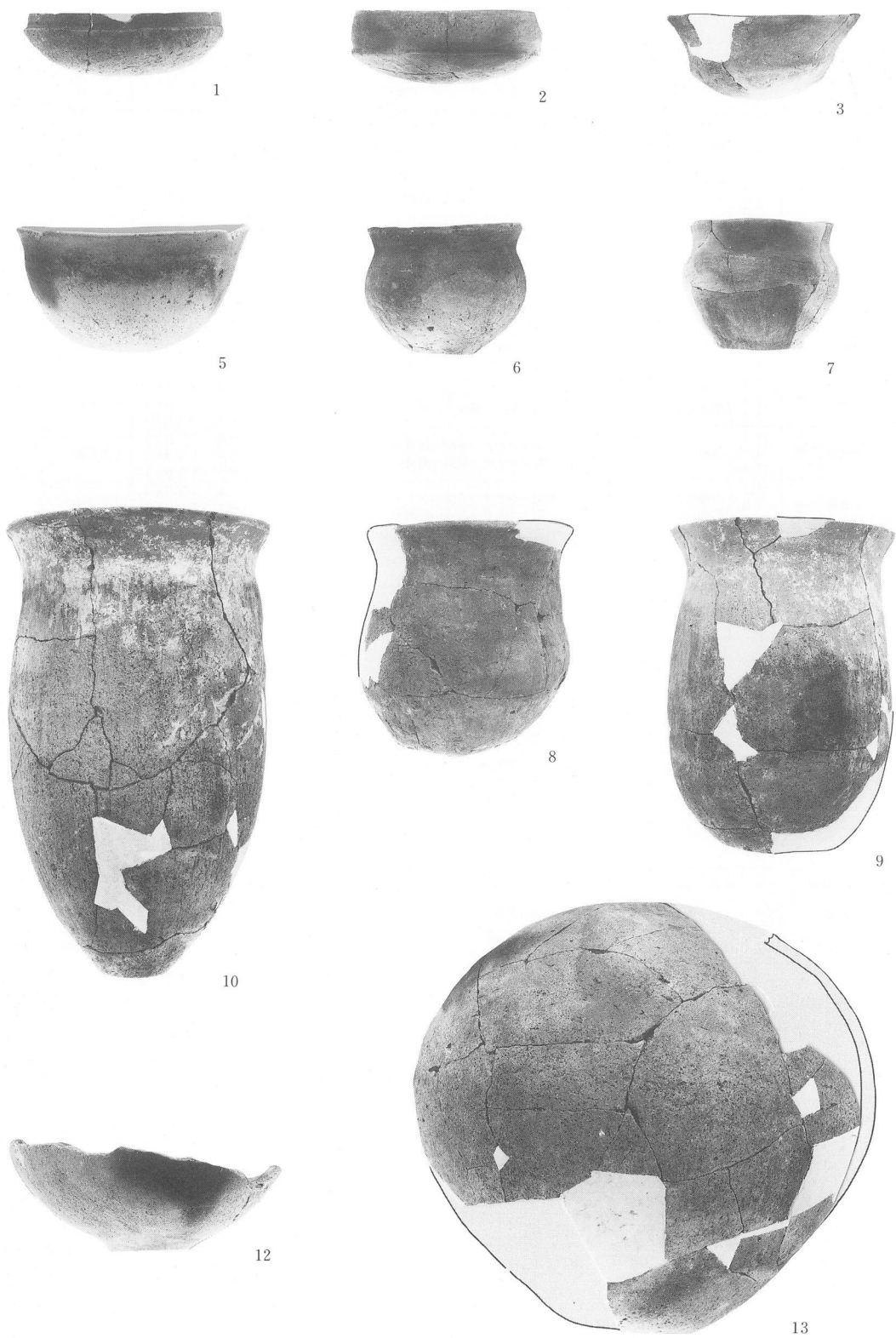


写真52 H11号住居址出土土器

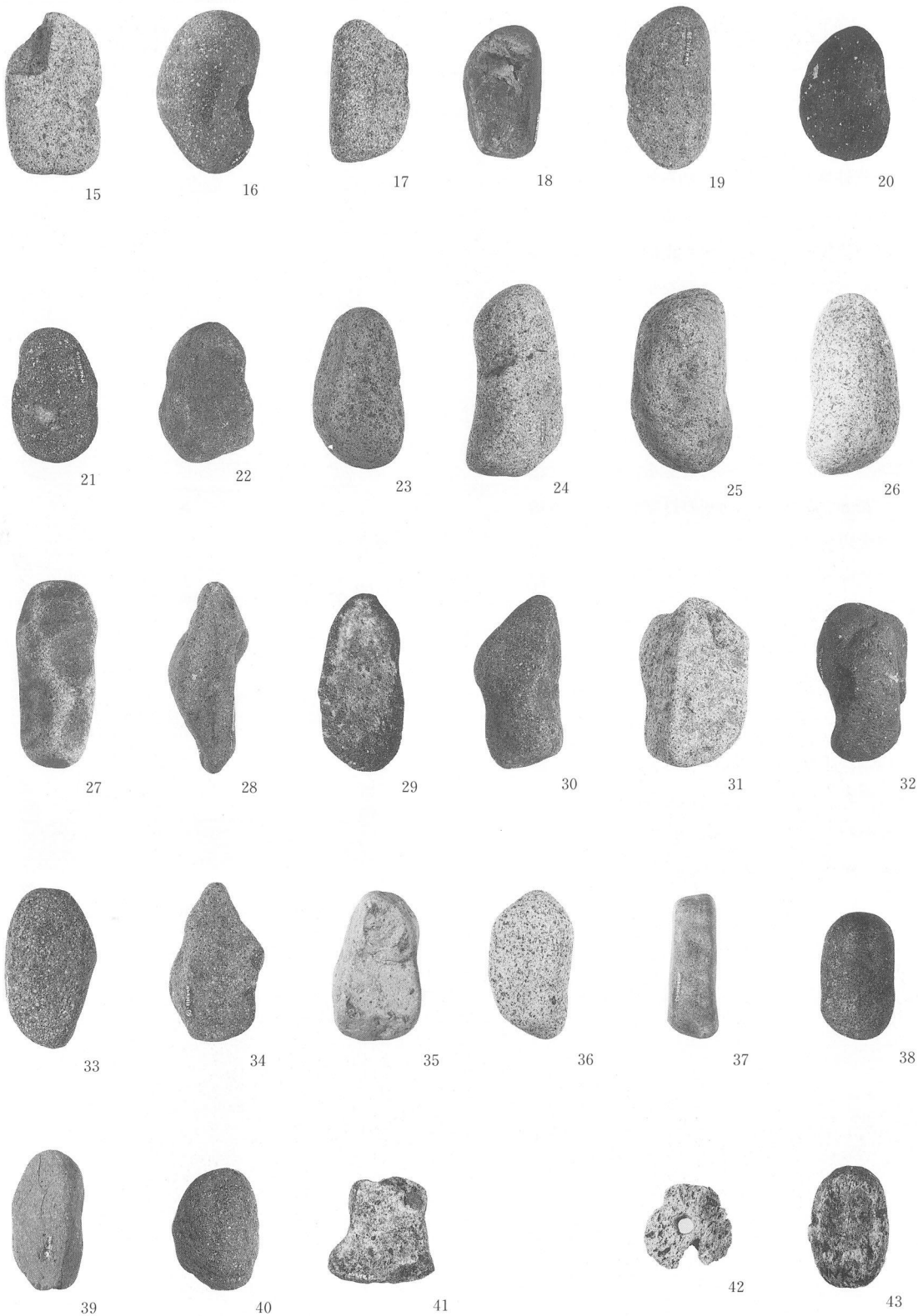


写真53 H11号住居址出土石器

(12) H12号住居址

古墳時代

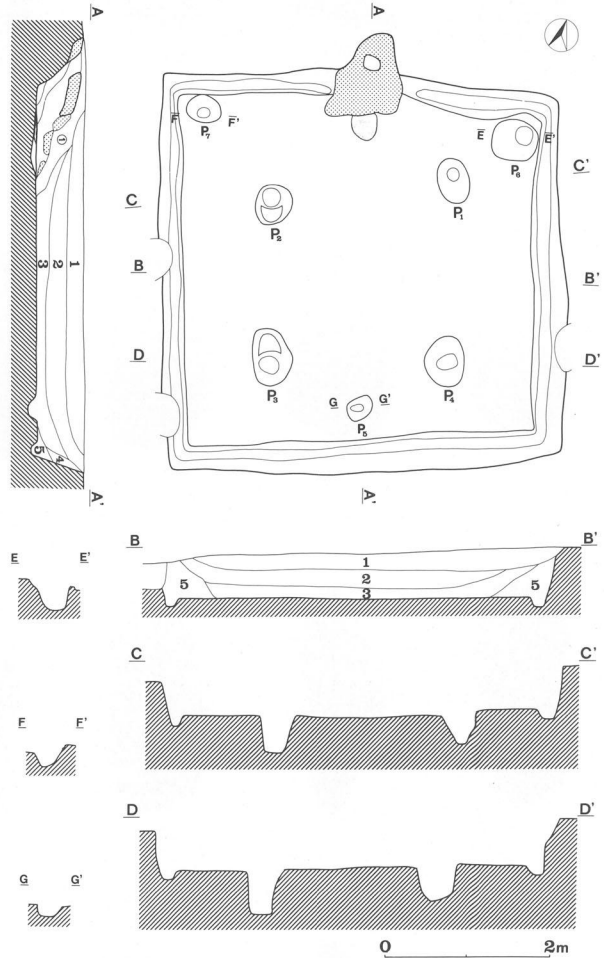
H12号住居址の検出位置は、第I区Pかき2グリッドである。西壁上部2箇所がF6号掘立柱建物址によって切られ、東壁上部1箇所がピットで切られている。

平面形態は、北東隅が不正形であるが、基本的に方形に近い隅丸方形を呈する。

南北4.8m、東西4.9mを測り、床面積は20.1㎡の規模を有する。主軸方向はN-10°-Wを指す。

壁は100度程の急傾斜で立ち上がり、確認面からの壁高は47~57cmである。壁直下に幅10~26cm、深さ2~19cmのU字形を呈する周溝が全周する。

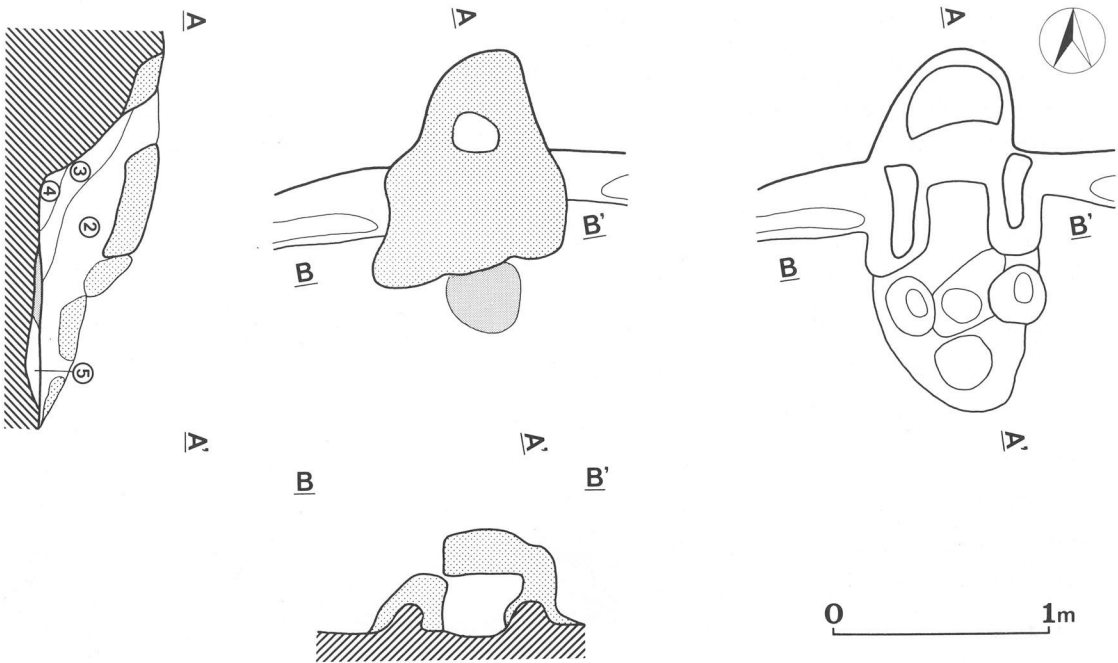
支柱穴は4個(P1~P4)が規則的な配置で設定されている。P1は56×39cm、深さ41cm、P2は50×45cm、深さ47cm、P3は70×48cm、深さ53cm、P4は62×50cm、深さ45cmである。また、南壁中央際で26×34cm、深さ13cmの出入口部関連の小ピット(P5)が検出されている。さらに、東西隅の対称的な位置から、49×56cm、深さ38cmのP6と33×42cm、深さ26cmのP7が検出されている。



第53図 H12号住居址実測図 (1 : 80)



写真54
H12号住居址



第54図 H12号住居址カマド実測図（1：30）

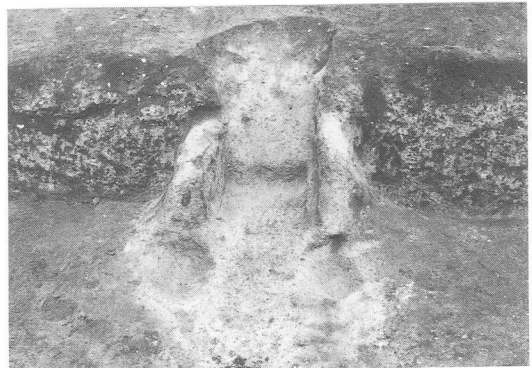


写真55 H12号住居址カマド

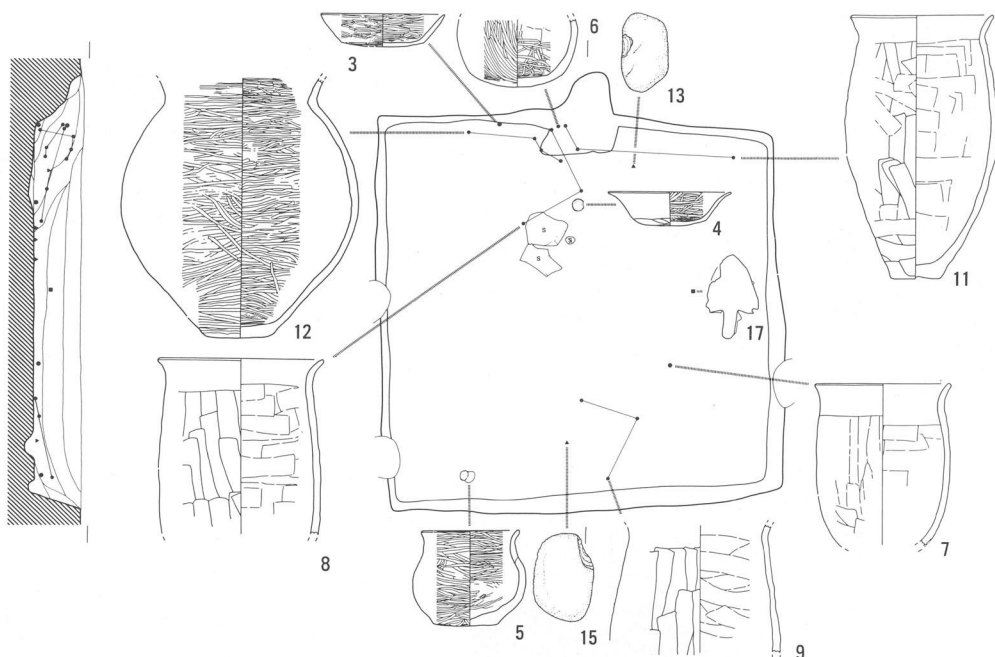
住居覆土は、褐色土（5層）が壁際を埋め、南壁上部では黒色土（4層）の堆積がみられる。住居全体は暗褐色土（1層）、パミス・ローム粒子を多量に含む暗褐色土（2層）、パミス・ローム粒子を含む暗褐色土（3層）の堆積である。

カマド

北壁中央部に位置する。煙道部は、半円形状に緩やかな傾斜で掘り込まれ、壁外では僅かに断を有し、赤色粘土が貼られていた。袖部は、地山を掘り残して造り出されたものである。両袖部先端では、袖石を埋め込んだと考えられる小ピットが確認された。袖部には赤色粘土が貼られ、赤色粘

土で構築された天井部が一部残存していた。カマド前面には赤色粘土ブロックが崩落しており、袖石等が抜き取られたと考えられることから、焚口部は破壊されたと推定される。その状況として、天井石に用いられていたと考えられる安山岩の大形板状礫2点が、カマド前面に廃棄されていた。

カマドの覆土は、上面を赤色粘土粒子を多量に含む暗褐色土（①層）が覆い、カマド内は黒褐色土（②層）、奥壁に貼られた粘土の流出と考えられる暗赤褐色土（③層）、黒褐色土（④層）、火床面形成の浅い掘り込みを埋めた暗褐色土（⑤層）である。



第55図 H12号住居址遺物分布図

遺物

検出された主要遺物は、須恵器坏、土師器坏・甕、編物石、鉄鏃であり、土師器坏・甕は古墳時代後期の土器様相を示している。

1は、須恵器高台付坏で、底部は回転ヘラケズリで調整されている。Ⅱ区2層から出土している。

2は、底部切り離しが回転ヘラ切りによる須恵器坏で、Ⅲ区1層の出土である。

3・4は土師器坏で、平底ないし扁平な丸底を呈し、体部が外傾ないし外反するものであり、内面黒色処理はみられない。3はカマド西脇の周溝上面から検出され、4はカマド手前の床面から出土している。

5・6は、ヘラミガキで調整された球胴を呈する小形甕である。5は完形品で南西隅の5層から検出されている(写真56)。6はカマド内②層とⅠ区3層に破片が分布していたものである。

7~11は長胴甕である。7は小形でⅣ区3層から出土している。8はカマド内②層からカマド前面の①層に破片が分布していたものである。9は南壁際の3層中に破片が分布していたものである。

10は底部破片が①層からⅡ・Ⅲ区1層に分布していた。11は全体の形状が知れるもので、カマド内②層に破片の集中がみられたものである。

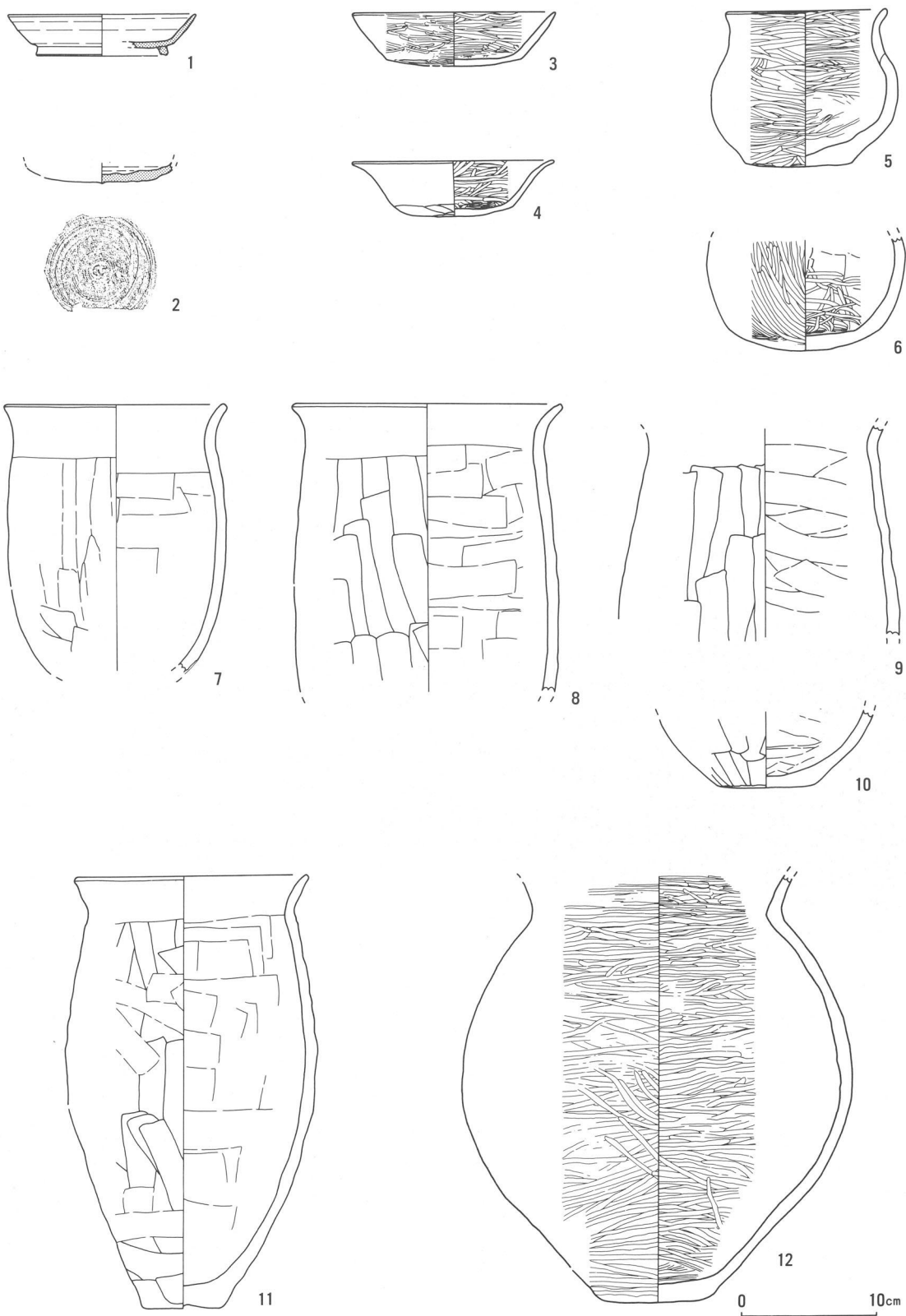
12は内外面ともヘラミガキで調整された球胴形の甕で、カマド西脇の①層を主体に破片で分布していたものである。

13~16は編物石と考えられるものである。13には側縁にノッチ状の加工が施されている。分布では14・16が1層中のものであり、集中的な出土状態ではない。

17は鉄鏃で、Ⅰ区2層から出土したものである。



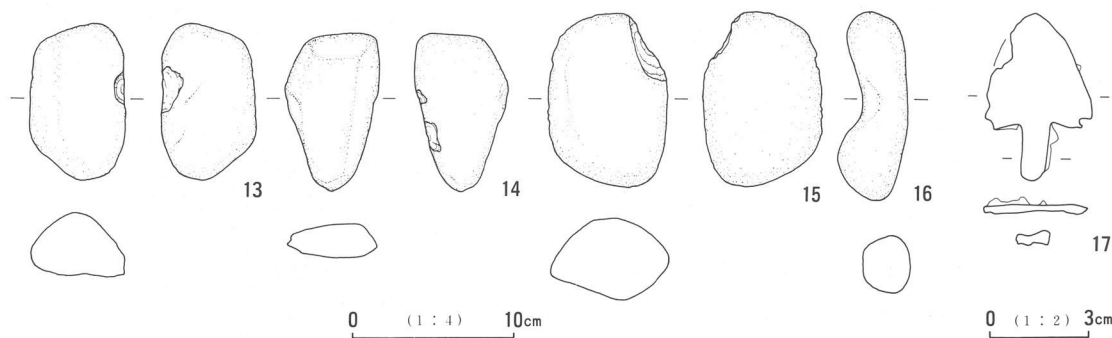
写真56 土器5出土状態



第56图 H12号住居址出土土器 (1:4)

表19 H12号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調	整	色調	出土位置	備考
1	須恵器	坏	(13.9) (9.8) 3.1	口縁1/5 底部1/4	ロクロ		→底部切り離し(切り離し方不明)→高台貼付 外面:底部回転ヘラケズリ	内面: N5/0 外面: 10GY5/1 断面: N5/0	Ⅱ区2層	
2	須恵器	坏	— <1.5>	底部破片	ロクロ		→底部回転ヘラ切り	内面:7.5YR5/1 外面:2.5GY5/1 断面:10YR5/1	Ⅲ区1層	
3	土師器	坏	15.0 9.9 4.0	口縁1/2 底部完形	非ロクロ		内面:ヘラミガキ 外面:口縁ヨコナデ・底部ヘラケズリ→ヘラミガキ	内面:10YR6/3 外面:10YR5/3 断面:10YR5/1	Ⅱ区床面	
4	土師器	坏	15.0 8.1 4.4	口縁2/3 底部完形	非ロクロ		内面:口縁ヨコナデ・底部ナデ→ヘラミガキ 外面:口縁ヨコナデ→底部ヘラケズリ	内面:7.5YR7/6 外面:5YR7/6 断面:7.5YR8/3	Ⅱ区床面	
5	土師器	甕	11.9 7.9 11.6	完形	非ロクロ		内面:ヘラミガキ 外面:ヘラミガキ	内面:5YR5/2 外面:2.5YR5/6 断面:7.5YR6/4	Ⅲ区5層	
6	土師器	甕	— <8.3>	底部2/5	非ロクロ		内面:ヘラナデ→ヘラミガキ 外面:ヘラケズリ→ヘラミガキ	内面:5YR6/6 外面:7.5YR6/6 断面:7.5YR8/4	カマド②層 Ⅰ区3層	
7	土師器	甕	16.6 — <19.8>	口縁1/2	非ロクロ		内面:胴部ヘラナデ→口縁ヨコナデ 外面:胴部ナデ後胴部下半ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	内面:2.5YR5/6 外面:2.5YR5/6 断面:5YR7/4	Ⅳ区3層	
8	土師器	甕	20.0 — <21.4>	口縁2/5	非ロクロ		内面:胴部ヘラナデ→口縁ヨコナデ 外面:胴部ヘラケズリ→口縁ヨコナデ	内面:7.5YR4/3 外面:5YR5/4 断面:5YR6/4	カマド ①・②層	
9	土師器	甕	— <15.6>	頸部~胴 上部完形	非ロクロ		内面:口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ 外面:口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ	内面:10YR3/2 外面:10YR3/2 断面:7.5YR7/6	Ⅳ区3層	
10	土師器	甕	(7.2) <5.7>	底部1/3	非ロクロ		内面:ヘラナデ 外面:ヘラケズリ	内面:5YR5/4 外面:7.5YR5/4 断面:2.5YR7/6	カマド①層 Ⅱ・Ⅲ区1層	
11	土師器	甕	(17.2) 6.0 32.2	口縁2/5 底部完形	非ロクロ		内面:口縁ヨコナデ→胴部~底部ヘラナデ 外面:胴部・底部ヘラケズリ・部分的にナデ→口縁ヨコナデ	内面:10YR5/2 外面:10YR5/4 断面:7.5YR6/6	カマド②層 Ⅰ区5層	
12	土師器	甕	8.1 <31.7>	底部完形	非ロクロ		内面:ヘラミガキ 外面:ヘラミガキ	内面:7.5YR7/8 外面:7.5YR6/4 断面:5YR7/6	カマド①層 Ⅱ区5層	



第57図 H12号住居址出土石器・鉄器

表20 H12号住居址出土石器・鉄器観察表

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
13	編物石	角閃石 安山岩	9.7	6.0	4.0	290	Ⅰ区①層	側縁に ノッチ状加工
14	編物石	輝石 安山岩	9.7	5.9	2.1	160	Ⅰ区1層	
15	編物石	石英 安山岩	10.7	7.5	5.0	380	Ⅲ区3層	
16	編物石	角閃石 安山岩	11.6	4.3	3.5	200	Ⅰ区1層	
17	鉄鏝	鉄	(5.1)	3.2	0.3	(8.8)	Ⅰ区2層	



写真57 H12号住居址出土遺物

(13) H13号住居址

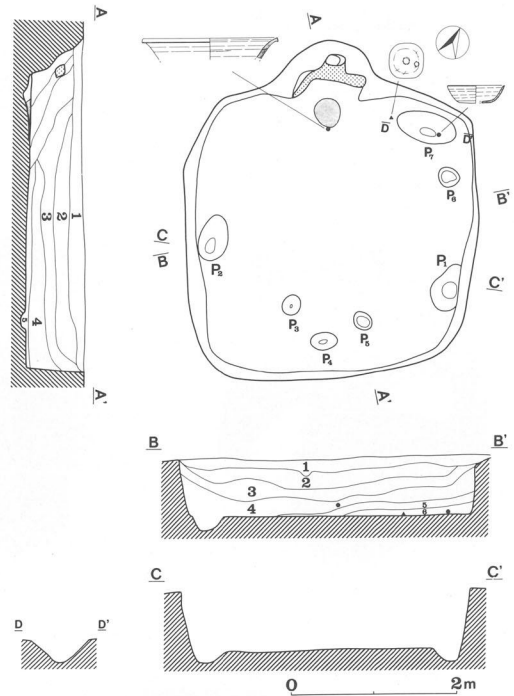
奈良時代

H13号住居址は、第I区Pお4・5グリッドより検出された。

平面形態は隅丸方形を呈し、南北3.5m、東西3.5m、床面積9.9㎡を測る小形の住居址である。主軸方向はN-23°-Wを指す。

壁は垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は60~73cmと深い。周溝は認められない。

ピットは7個確認されている。東壁に接するP1と西壁に接するP2の2個が対をなす支柱穴と思われるが、P1はやや南側に逸れており、定かではない。P1は58×33cm、深さ18cm、P2は56×35cm、深さ15cmを測る。P3~P5は南壁中央際にあり、P3とP5が並存し、その中央壁側にP4が位置する。出入口部施設に関連するものであろう。P3は25×22cm、深さ6cm、P4は21×32cm、深さ7cm、P5は20×26cm、深さ4cmを測る。P7は北東隅に位置し、37×74cm、深さ27cmの楕円形を呈するもので貯蔵穴と考えられようか。



第58図 H13号住居址実測図 (1:80)



写真58 H13号住居址

住居覆土は、黒褐色土とローム混入土の互層的堆積がみられ、人為的に埋め戻された状態を示していた。以下の6層に分層された。

1層：暗褐色土。2層：パミス・ローム粒子を多量に含む褐色土。3層：黒褐色土。4層：パミス・ローム粒子を多量に含む褐色土。5層：黒褐色土。6層：パミス・ローム粒子を多量に含む灰黄褐色土。

カマド

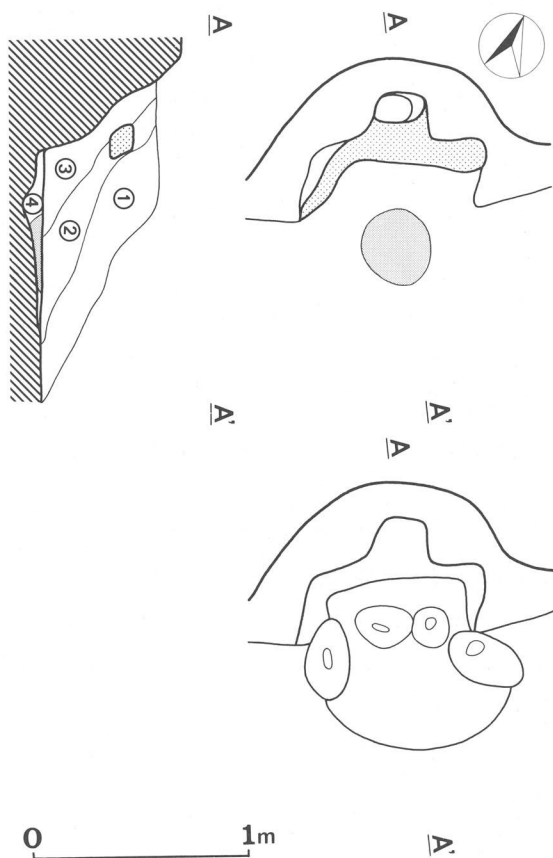
北壁中央部に設置されている。燃焼部は壁外に掘り込まれ、30×80cm程の長方形を呈している。煙道部は燃焼部奥壁中央の柱状の掘り込みと壁外の半円形状の掘り込みからなる。赤褐色粘土を構材とする天井部が奥壁に一部残されていた。火床面には袖部と中央に小ピットが検出された。

カマド覆土は、構材の赤褐色粘土ブロック、ロームブロックを含む灰黄褐色土（①層）、赤褐色粘土ブロックを多量に含む赤褐色土（②層）、灰黄褐色土（③層）、掘り方に貼られた赤褐色粘土混入土（④層）である。

遺物

須恵器坏・甕、紡錘車が検出されている。

1は手持ちヘラケズリで底部が調整された須恵器坏で、Ⅱ区2層中に廃棄されていたものである。2は底部および外周が回転ヘラケズリで調整された須恵器坏で、P7から出土している。以上の須

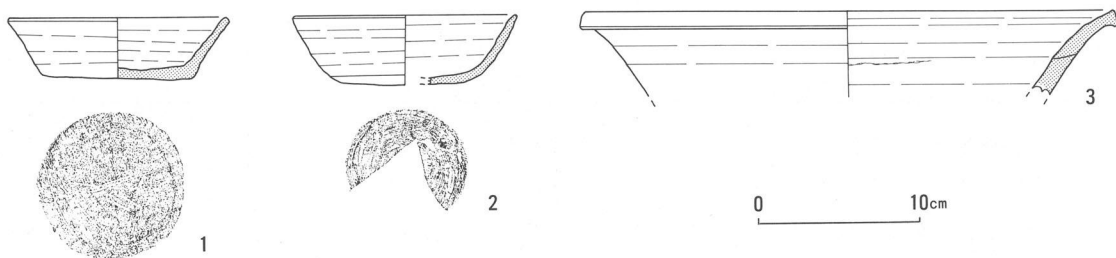


第59図 H13号住居址カマド実測図（1：30）

恵器坏は八世紀第Ⅲ四半期の土器と考えられようか。3は須恵器甕の口縁部破片で、カマド②層から出土したものである。4はP7左脇床面から検出された紡錘車で、中央部の右側にも穿孔が施されているものである。



写真59 H13号住居址カマド



第60図 H13号住居址出土土器（1：4）

表21 H13号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調	色調	出土位置	備考
1	須恵器	坏	13.6 9.1 3.7	口縁2/5 底部完形	ロクロ	→底部切り離し（切り離し方不明） 外面：底部手持ちヘラケズリ	内面： 7.5Y6/1 外面： 7.5Y6/1 断面： 10Y6/1	Ⅱ区2層	
2	須恵器	坏	13.8 7.6 4.3	口縁3/4 底部3/5	ロクロ	→底部切り離し（切り離し方不明） 外面：底部および外周回転ヘラケズリ	内面： 7.5Y6/1 外面： 7.5Y6/1 断面： 7.5Y6/1	P7	火瘻あり
3	須恵器	甕	33.0 — 〈5.2〉	口縁1/5	ロクロ		内面： 2.5Y4/1 外面： 10Y4/1 断面：5Y3/1.2.5Y4/1	カマド②層	

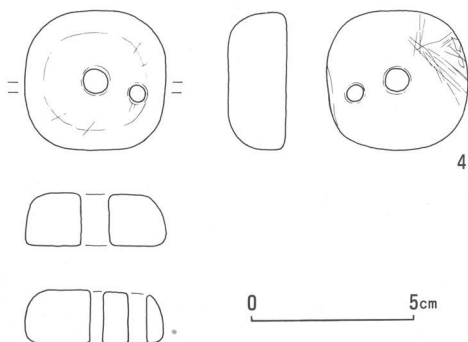


表22 H13号住居址出土石器観察表

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
4	紡錘車	流紋岩	4.3	4.3	1.8	41	I区床面	

第61図 H13号住居址出土石器（1：2）

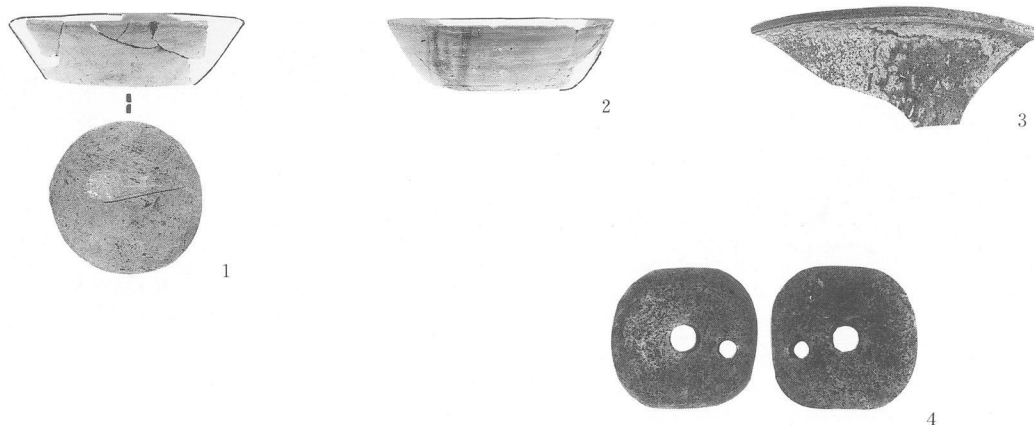


写真60 H13号住居址出土遺物

(14) H14号住居址

古墳時代

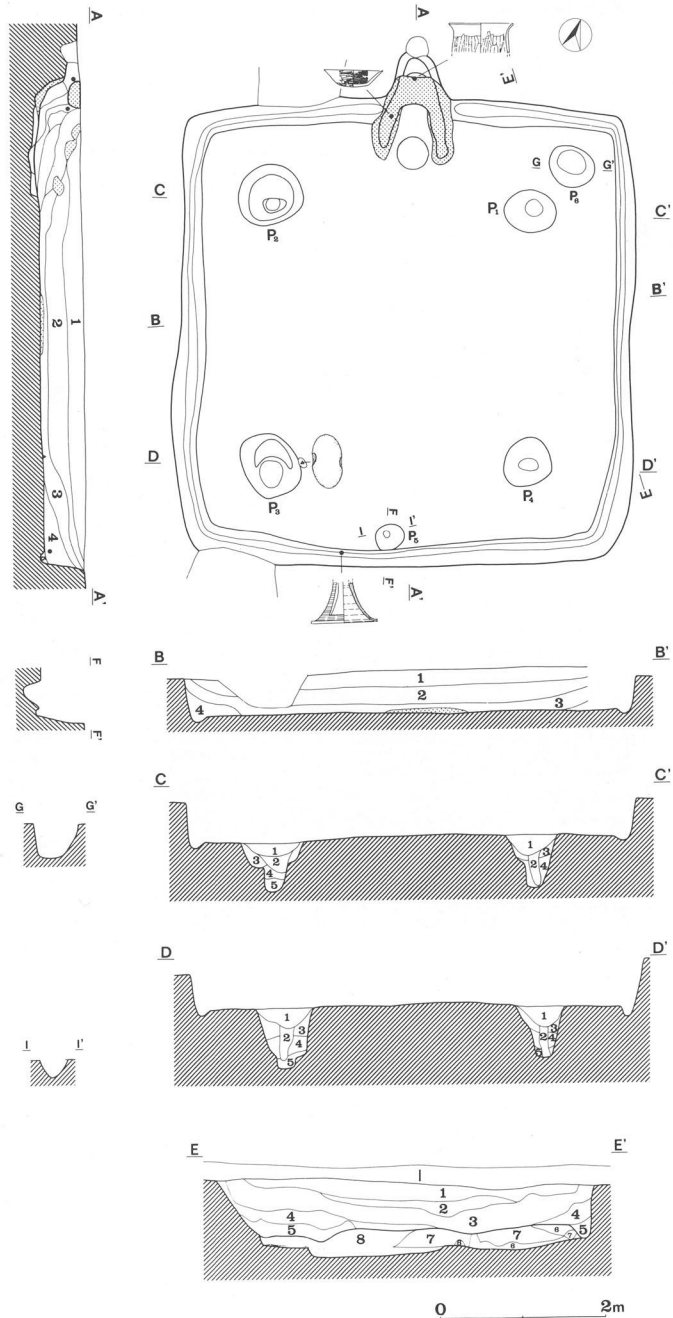
H14号住居址は、第I区Pう1・2グリッドより検出されている。南北壁東側上部が、M5号溝状遺構によって切られている。なお、Eセクション北側は聖原遺跡として調査された部分である。

平面形態は、整った隅丸方形を呈し、南北5.7m、東西5.4m、床面積27.7㎡を測る。主軸方向はN-20°-Wを指す。

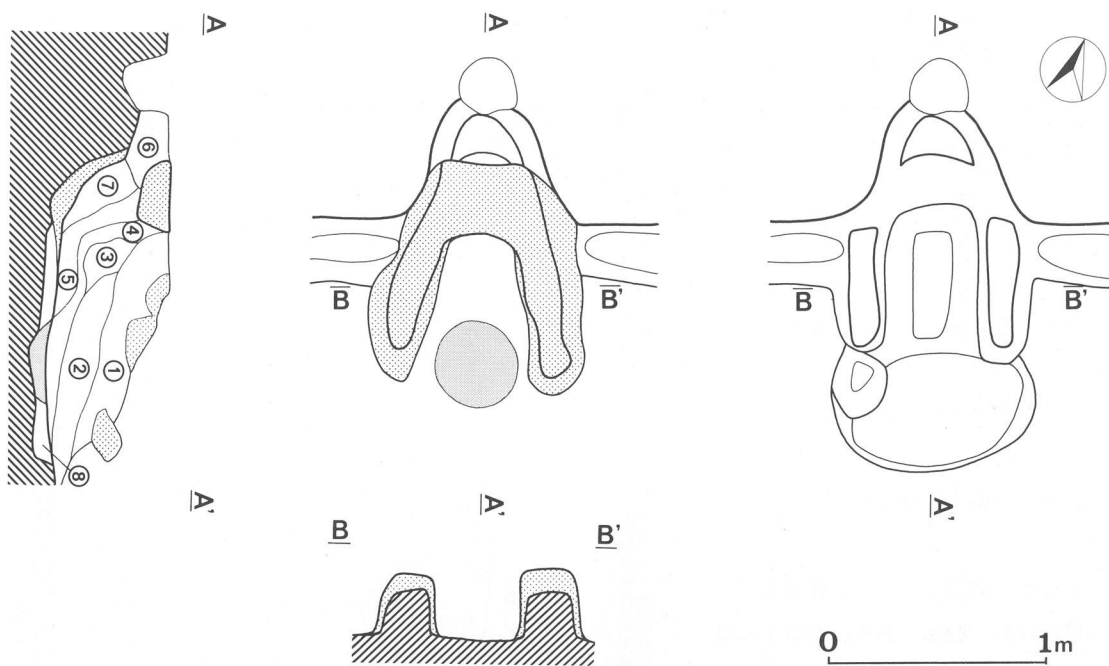
壁は垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は44~48cmである。壁直下に幅8~25cm、深さ2~24cmのU字形を呈する周溝が全周する。

支柱穴は、壁よりに規則的に配置された4個(P1~P4)である。掘り方は2段の掘り込みで、径10cm程の柱痕が確認された。P1は52×62cm、深さ65cm、P2は72×77cm、深さ60cm、P3は79×66cm、深さ73cm、P4は56×57cm、深さ62cmを測る。また、南壁中央に接する位置に、31×36cm、深さ23cmの小ピット(P5)が確認された。さらに、50×57cm、深さ41cmのP6が北東隅で確認されている。

覆土は、パミス・ローム粒子を多量に含む暗褐色土(5層)、黒色土(4層)が壁際を埋め、住居全体はパミス・ローム粒子を多量に含む暗褐色土(1層)・黒褐色土(2層)、にぶい黄褐色土(3層)の堆積である。なお、Eセクションで確認した掘り方部分では、ロームと褐色土の充填が確認されている(6~8層:7層はロームブロック、6層は褐色土ブロックである)。



第62図 H14号住居址実測図(1:80)



第63図 H14号住居址カマド実測図 (1:30)

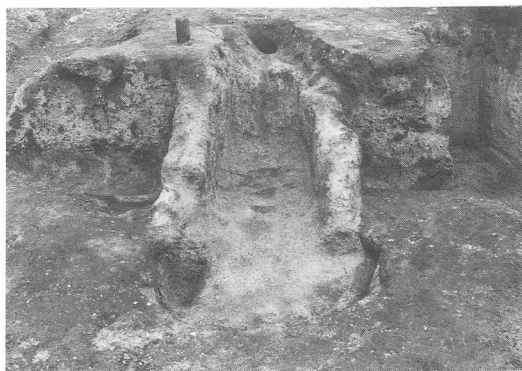


写真61 H14号住居址カマド

カマド

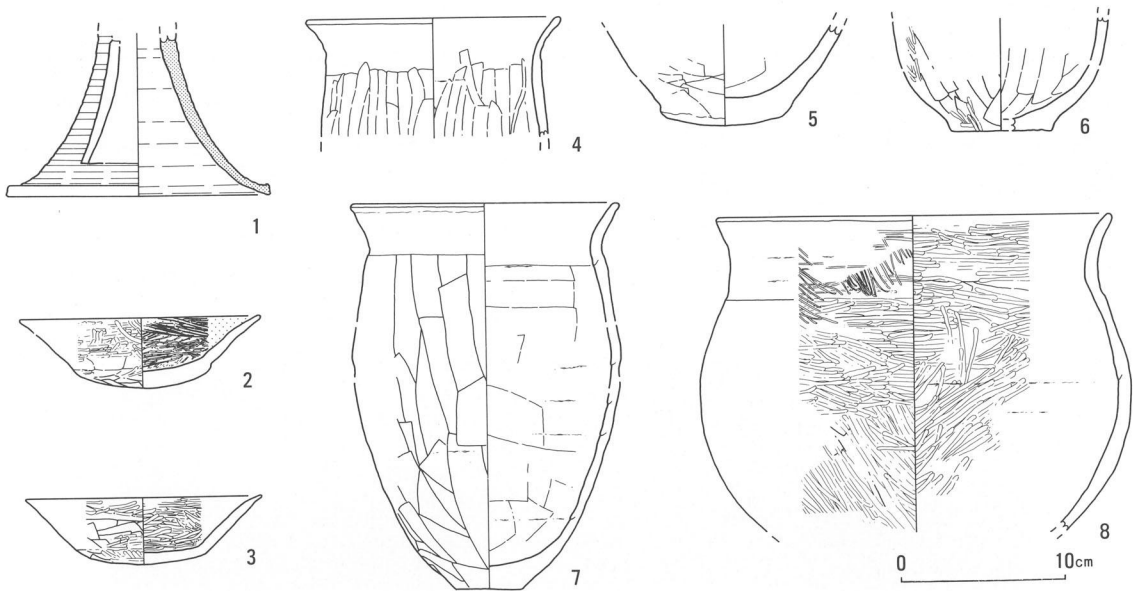
北壁中央部に位置する。煙道部は舟先状の掘り込みからなり、立ち上がり部には灰白色・橙色粘土が貼られている(先端のピットは攪乱)。袖部は地山で芯が造り出されたものがある。袖部から煙道部にかけて貼られた橙色粘土が残り、一部天井部が確認された。また、左袖部先端には袖石埋め込み用と考えられるピットが確認された。

覆土は、褐色土(⑥層)、黒褐色土(⑦層)が煙道部を埋め、カマド上面には大形の灰白色・橙色粘土ブロックを含む灰褐色土(①層)の堆積、カ

マド内には小形の灰白色ブロックを多量に含む灰黄褐色土(②層)、灰白色ブロック主体の褐色土(③層)、橙色粘土ブロック主体の褐色土(④層)、褐色土(⑤層)の堆積である。また、焚口部の皿状の掘り方、火床部の長方形の掘り方は、ロームブロックを混ぜた暗褐色土(⑧層)で充填されていた。

遺物

検出された主要遺物は、古墳時代後期の土器様相を示す須恵器高坏と土師器坏・土師器長胴甕・土師器球胴甕である。また編物石と考えられる石



第64図 H14号住居址出土土器 (1 : 4)

表23 H14号住居址出土土器観察表

挿図番号	種別	器形	法量	残存	成形	調	整	色調	出土位置	備考
1	須恵器	高杯	— (16.2) < 9.9)	脚端部 1/3	ロクロ	外面：沈線を施す→透し窓を穿つ		内面： N6/0 外面： N6/0 断面： N6/0	Ⅲ区4層	
2	土師器	杯	(14.8) 8.2 4.3	口縁2/3 底部完形	非ロクロ	内面：ヘラミガキ→黒色処理 外面：口縁→体部ヨコナデ・底部ヘラケズリ→ヘラミガキ		外面：7.5YR7/4 断面：7.5YR5/2	N区3層 Ⅲ区2層	
3	土師器	杯	14.4 7.9 4.1	完形	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ・みこみ部ナデ→ヘラミガキ 外面：口縁ヨコナデ・体部→底部ヘラケズリ→ヘラミガキ		内面： 5YR6/6 外面： 5YR6/6	カマド袖	
4	土師器	甕	(15.6) — < 7.3)	口縁1/4	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ→胴部ナデ 外面：口縁ヨコナデ→胴部ナデ		内面：7.5YR6/4 外面： 5YR6/4 断面： 5YR6/4	カマド⑥層	
5	土師器	甕	— 7.0 < 6.1)	底部完形	非ロクロ	内面：ヘラナデ 外面：ナデ		内面：10YR7/4 外面：7.5YR4/1 断面：10YR7/4	カマド②層 P2	
6	土師器	甕	(6.0) < 6.8)	底部1/3	非ロクロ	内面：ナデ 外面：ヘラケズリ後ヘラミガキ		内面：10YR4/1 外面： 5YR6/4 断面： 5YR6/4	N区3層	
7	土師器	甕	(16.4) (4.0) 23.4	口縁1/4 底部1/2	非ロクロ	内面：胴部→底部ヘラナデ→口縁ヨコナデ 外面：胴部・底部ヘラケズリ→口縁ヨコナデ		内面： 5YR6/4 外面： 5YR6/4 断面： 5YR6/4	カマド②層	
8	土師器	甕	(24.0) — < 19.2)	口縁1/4	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ→ヘラミガキ 外面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラケズリ→ヘラミガキ		内面： 5YR6/6 外面： 5YR6/6 断面： 5YR7/4	カマド②層	

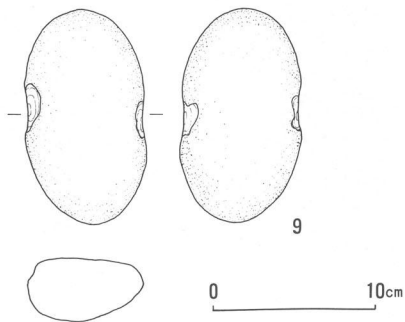


表24 H14号住居址出土石器観察表

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
9	編物石	角閃石 安山岩	14.1	7.5	4.0	480	Ⅲ区床面	両側縁に ノッチ状加工

第65図 H14号住居址出土石器 (1 : 4)

器もみられた。

1は、須恵器高坏の脚部破片で、南壁周溝上の4層から出土したものである。

2・3は、体下位に稜を有する土師器坏で、2は内面黒色処理されたものである。2はⅣ区3層とⅢ区2層に破片が分布していたものである。3は、カマド左袖の粘土に張り付いた状態で出土した完形品である。

4～8は、土師器甕で、4はカマド煙道部⑥層から検出された長胴甕、5はカマド②層とP2内から検出された底部破片、6はⅣ区3層に分布していた球胴甕の底部である。7の小形長胴甕と8のヘラミガキされた球胴甕は、それぞれカマド②層に破片が集中していたものである。

9は編物石と考えられ、両側縁にノッチ状の加工が施されている。P3脇床面で出土している。



写真62 H14号住居址

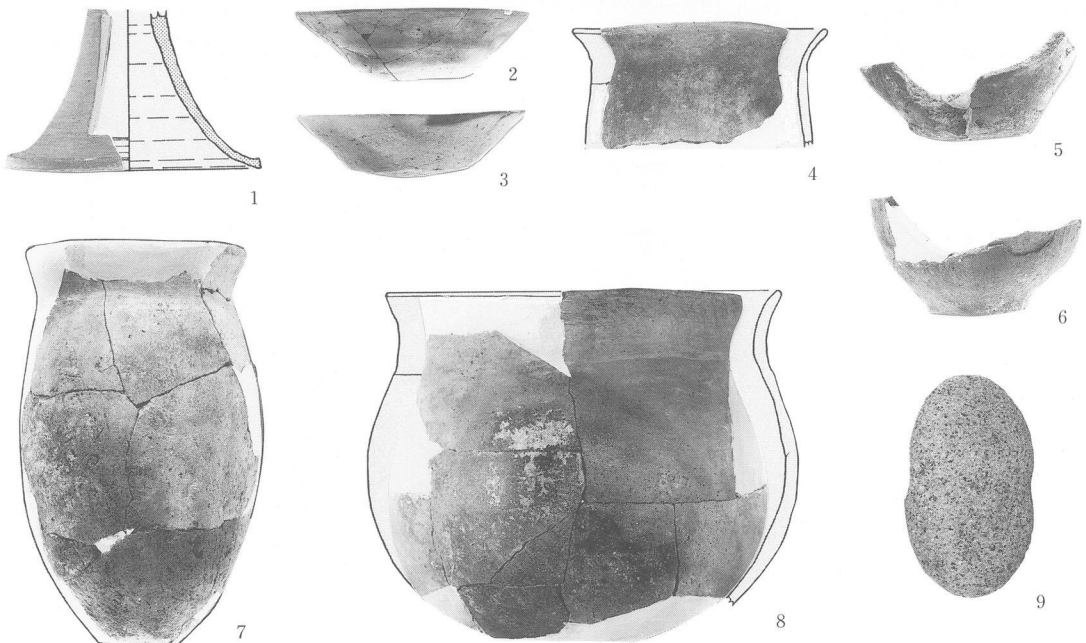


写真63 H14号住居址出土遺物

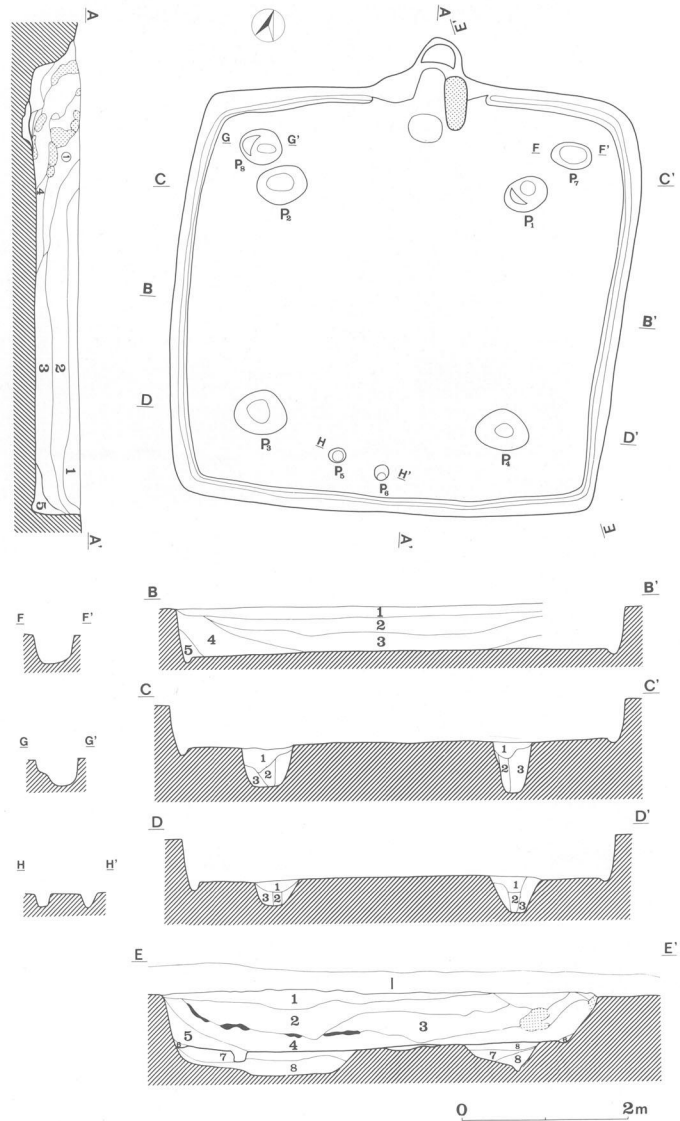
H15号住居址は、第I区Pい2・3グリッドより検出されている。本住居址のEセクション北側箇所は、聖原遺跡として調査された部分である。

南北5.2m、東西5.4mのやや歪んだ隅丸方形を呈し、床面積は24.8㎡である。主軸方向はN-12°-Wを指す。

壁は垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は60~72cmである。壁直下に幅7~16cm、深さ3~14cmのU字形を呈する周溝が全周する。

支柱穴は、径10cm程の柱痕が確認された4個(P1~P4)が壁よりに規則的に配置されていた。P1は41×54cm、深さ61cm、P2は48×52cm、深さ46cm、P3は53×65cm、深さ29cm、P4は50×66cm、深さ43cmである。南壁中央側では、小ピット2個(P5・P6)の並存が確認された。P5は18×20cm、深さ17cm、P6は20×18cm、深さ18cmである。また、東西隅の対称的な位置に32×49cm、深さ45cmのP7と44×53cm、深さ34cmのP8が存在していた。

覆土は、周溝を黄褐色土(6層)が埋め、パミス・ローム粒子を含む黒褐色土(5層)、にぶい黄褐色土(4層)が壁際を埋める。住居全体は暗褐色土(1層)、パミス・ロームブロックを多量に含む褐色土(2層)、黒褐色土(3層)の堆積である。なお、Eセクションで確認した掘り方部分では、ロームと褐色土の充填によって床面が形成されていた(7・8層、7層はロームブロック)。



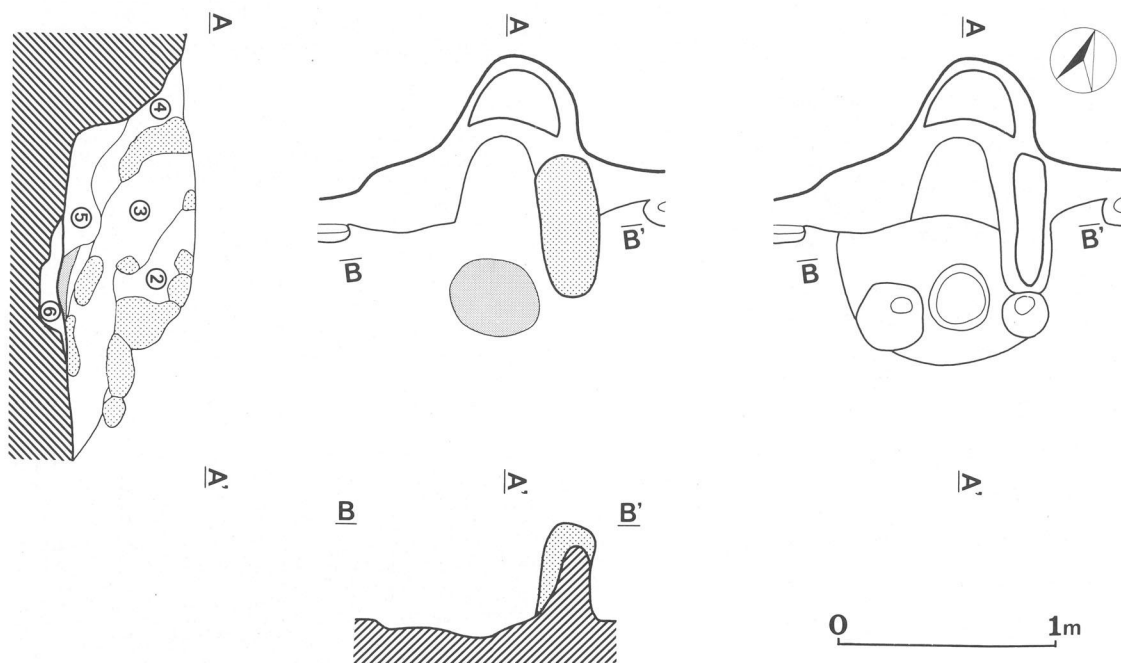
第66図 H15号住居址実測図(1:80)



写真64 H15号住居址覆土



写真65 H15号住居址



第67図 H15号住居址カマド実測図 (1:30)

カマド

北壁中央に存在する。煙道部は半楕円形状の2段の掘り込みである。地山で造り出し粘土を貼って構築された袖部は、右袖部のみが残存していた。両袖部先端には袖石埋め込み用と考えられる小ピットが確認された。

覆土は、カマド前面に広がる粘土粒子を多量に含む黒褐色土（①層）、崩落した橙色粘土ブロックを含む暗褐色土（②層）と黒褐色土（③層）、煙道部を埋める黄褐色土（④層）、炭化物片・灰を含む黒褐色土（⑤層）である。また、⑥層は火床部の皿状の掘り方を充填した土層で、ローム混入の暗褐色土である。

遺物

検出された主要遺物は、土師器坏・甕、編物石、敲石である。

1は稜を上部に有し、口縁部が短く内湾する土師器坏で、Ⅲ区3層から出土したものである。

2は球胴形を呈すると考えられる土師器甕底部破片で、ヘラミガキが施されている。カマド③層の出土である。

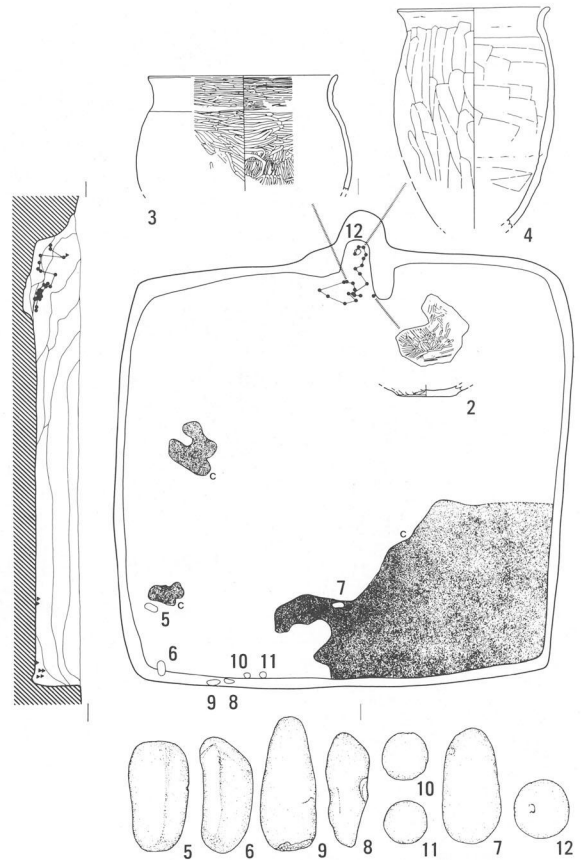
3はヘラミガキされた土師器球胴甕で、カマド③層に破片が集中分布していたものである。

4は土師器長胴甕で、カマド③～⑤層に破片が集中分布していたものである。

5～8は明確な加工・使用痕はみられないが、編物石と考えられようか。9は端部に顕著な敲打痕がみられる敲石である。5・6・8・9は南西隅壁際に集中分布する。また、この分布範囲に円形に整形された軽石2点（10・11）があった。同様なもの（12）はカマド③層でも出土している。

なお、南東隅の5層ないし4層上面にはカヤ状の炭化材が広範囲に分布していた。

本住居址検出の土器は、古墳時代後期の土器様相と考えられる。



第68図 H15号住居址遺物分布図

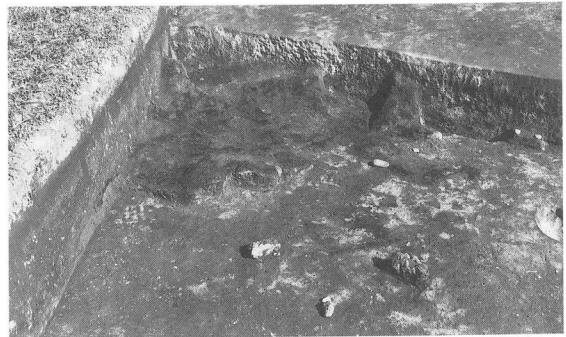
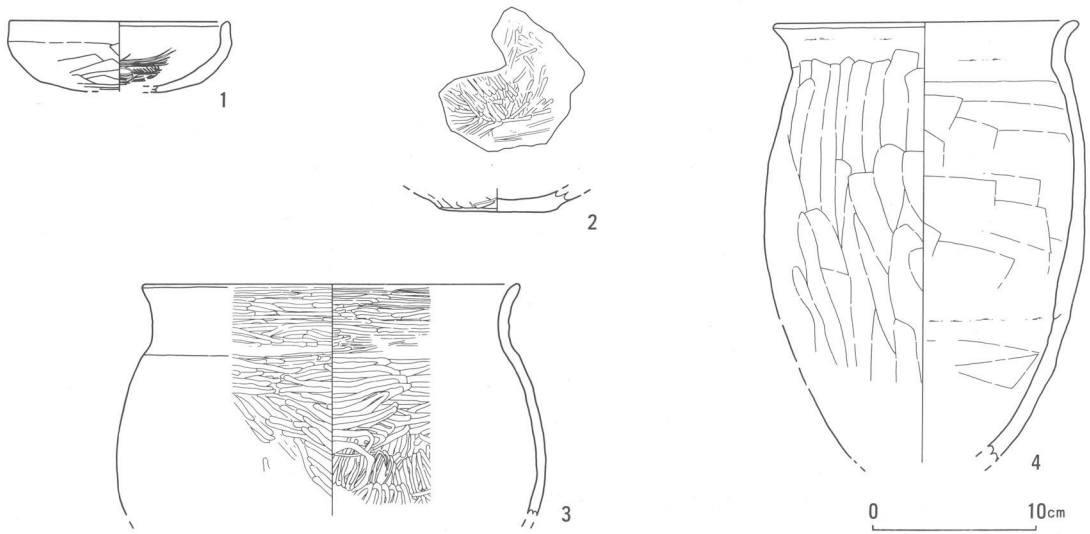


写真66 カヤ状炭化材出土状態



第69図 H15号住居址出土土器（1：4）

表25 H15号住居址出土土器観察表

挿図 番号	種別	器形	法量	残存	成形	調	整	色調	出土位置	備考
1	土師器	坏	(13.5) — <4.3>	底部1/5	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ・みこみ部ナデ→ヘラミガキ 外面：口縁ヨコナデ→体部～底部ヘラケズリ		内面：7.5Y R6/3 外面：7.5Y R6/3 断面：7.5Y R6/3	Ⅲ区3層	
2	土師器	甕	— (7.2) <1.3>	底部3/4	非ロクロ	内面：ナデ→ヘラミガキ 外面：ヘラケズリ→ヘラミガキ		内面：7.5Y R6/4 外面：7.5Y R7/4 断面：7.5Y R7/4	カマド③層	
3	土師器	甕	(23.0) — <14.0>	口縁1/3	非ロクロ	内面：ヘラミガキ 外面：ヘラミガキ		内面：5 Y R6/6 外面：5 Y R6/6 断面：5 Y R6/6	カマド③層	
4	土師器	甕	18.4 — <26.9>	口縁2/3	非ロクロ	内面：口縁ヨコナデ→胴部ヘラナデ 外面：口縁ヨコナデ→胴部ナデ		内面：5 Y R6/3 外面：5 Y R6/3 断面：5 Y R6/3	カマド ③～⑤層	

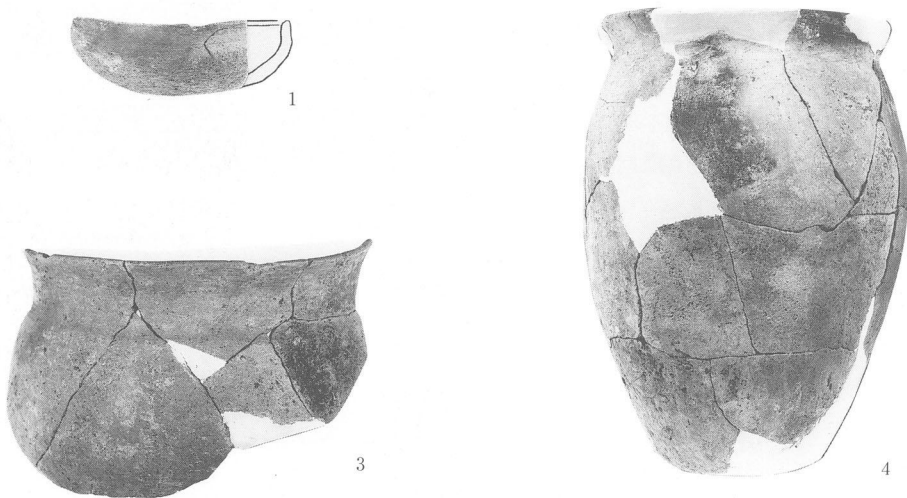
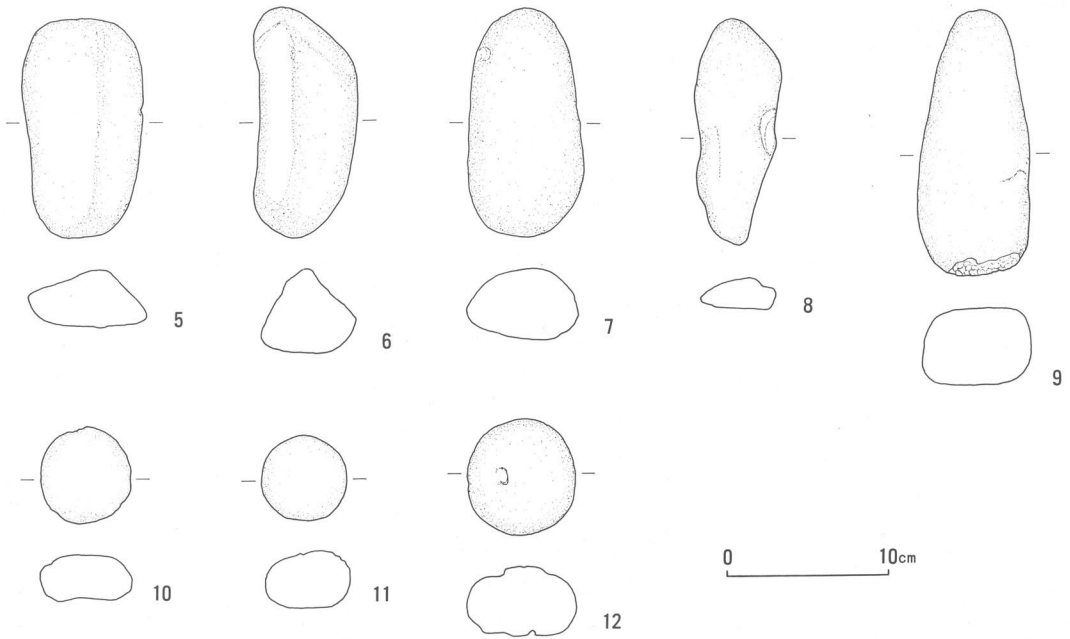


写真67 H15号住居址出土土器



第70図 H15号住居址出土石器 (1 : 4)

表26 H15号住居址出土石器観察表

挿図番号	器種	材質	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置	備考
5	編物石	石英 安山岩	13.4	7.5	3.9	480	Ⅲ区床面	
6	編物石	角閃石 安山岩	14.2	6.4	5.8	500	Ⅲ区床面	
7	編物石	安山岩	14.1	7.0	5.1	560	Ⅲ区3層	
8	編物石	輝石 安山岩	13.9	5.3	2.2	220	Ⅲ区5層	
9	敲石	石英 安山岩	16.4	6.9	5.0	840	Ⅲ区5層	端部に敲打痕
10	不明	軽石	5.9	5.5	2.9	40	Ⅲ区5層	
11	不明	軽石	5.3	5.2	3.5	60	Ⅲ区5層	
12	不明	軽石	7.1	6.7	4.4	100	カマド ③層	

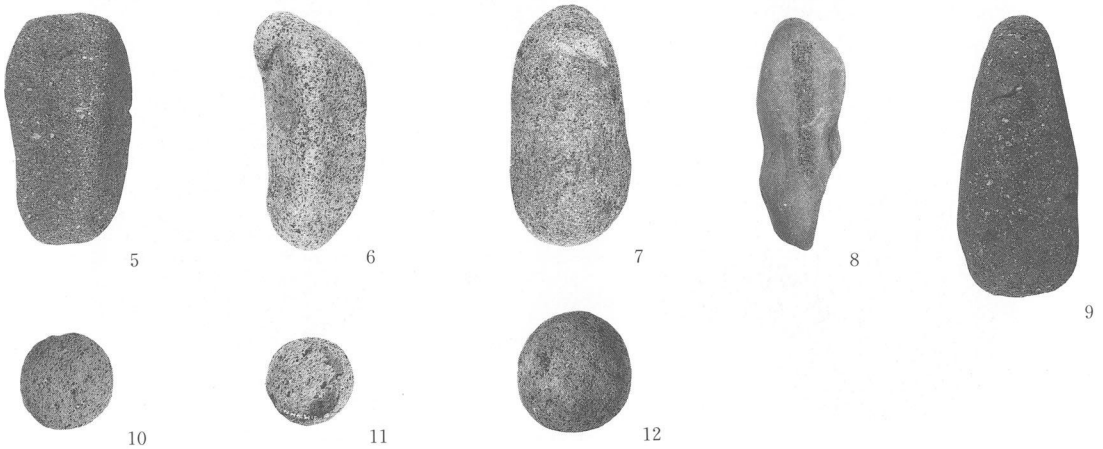


写真68 H15号住居址出土石器

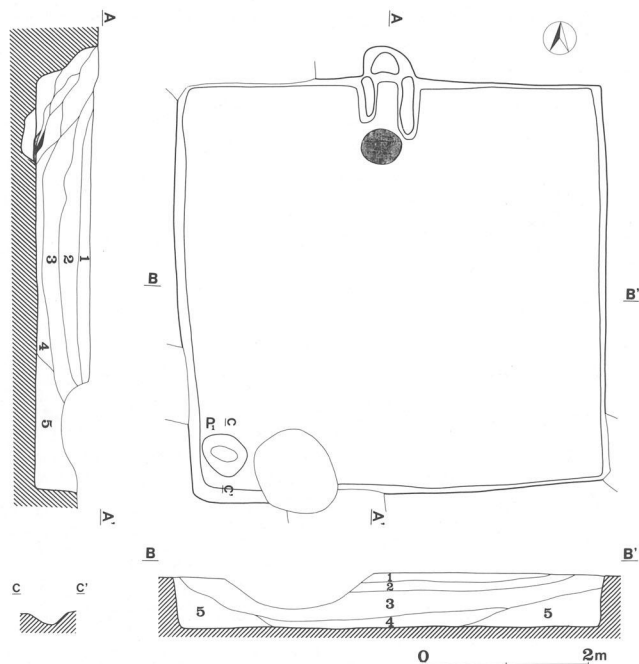
H16号住居址は、第1区Pあ・い7・8グリッドより検出されている。南北壁西側上部および東西壁南側上部は、M3・5号溝状遺構に切れ、南壁西側では、さらに床面まで攪乱坑によって破壊されていた。

平面形態は、南北5.0m、東西5.2mの整った方形を呈し、床面積は23.6㎡を測る。主軸方向はN-5°-Wを指す。

壁は垂直に立ち上がり、確認面からの壁高は57~64cmである。周溝は存在しない。

ピットは、47×58cm、深さ15cmの浅いP1のみが南西隅で確認された。

覆土は、5層に分層された。5層は、ロームブロックを多量に含む褐色土で壁際の堆積土である。住居全体の堆積は、1層の黒褐色土、2層の暗褐色土、パミス・ローム粒子を多く含む3層の黒褐色土、4層の黒褐色土であった。



第71図 H16号住居址実測図 (1:80)



写真69 H16号住居址